小社遺跡（第２次）・辻ノ内遺跡発掘調査報告

～度会郡玉城町小社曽根～

２０２２（令和４）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、農業用施設アスベスト対策事業（城田・下外城田地区）に伴う小社遺跡・辻ノ内遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査地は、三重県度会郡玉城町小社曽根に位置する。

3　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。発掘調査および整理作業の経費は、国庫補助金を得て三重県教育委員会が一部負担し、他は三重県農林水産部から執行委任を受けた。

4　発掘調査期間は令和元年９月25日～令和２年１月24日である。

5　発掘調査面積は、小社遺跡560㎡、辻ノ内遺跡66㎡である。

6　調査の体制は以下の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課　主査　櫻井拓馬　倉野雅文

主任　元座範子

土工委託　丸文工業株式会社

7　本書の編集・執筆は櫻井があたった。遺物写真は田中久生が撮影した。

8　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「伊勢」相当、平成18年10月発行）、三重県共有デジタル地図（2020）の1:2,500地形図（06PF642・651番）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（令和３年４月５日付三総合地第１号）。

2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

3　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

4　土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器等の色調表記もこれに従う。

5　遺物実測図の縮尺は1:4である。

6　註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。

7　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
・色調は外面のみ、標準土色帖の色名（「黄橙色」など）を記す。マンセル記号の表記は省略した。
・土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。1/12以下のものは「口縁部片」など。
・口径、底径は完存ないし復元の値である。実測時の接地面ではなく、外周で計測した値とした。また、土師器皿の底径は記していない。高さ、幅等は残存値である。

8　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目　次

例言・凡例 …… i・ii
目　次 …… iii～iv

Ⅰ　前　言 …… 1
1．調査に至る経緯
2．調査の経過
3．文化財保護法にかかる諸手続

Ⅱ　位置と環境 …… 4

Ⅲ　遺　構 …… 6
1．基本層序と微地形
2．A区
3．B区
4．C区
5．D区
6．E区
7．辻ノ内遺跡

Ⅳ　遺　物 …… 25

Ⅴ　総　括 …… 42
1．弥生・古墳時代
2．古代・中世

巻末写真図版

挿図目次

第１図　範囲確認調査位置図 …… 2
第２図　小社遺跡位置図 …… 3
第３図　遺跡分布図 …… 5
第４図　Ａ区遺構全体図 …… 10
第５図　Ｂ区遺構全体図 …… 11
第６図　Ｃ区遺構全体図 …… 12
第７図　Ｄ・Ｅ区遺構全体図 …… 13
第８図　Ａ区南壁土層断面図 …… 14
第９図　Ｂ区西壁土層断面図 …… 15
第10図　Ｃ区南壁土層断面図① …… 16
第11図　Ｃ区南壁②、Ｄ区南壁土層断面図 …… 17
第12図　Ｅ区南壁土層断面図、基本土層柱状図 …… 18
第13図　Ａ・Ｂ区個別遺構図　ＳＨ５、ＳＨ６・36、ＳＨ12・13、ＳＨ19・20・35、ＳＨ22・34 …… 19
第14図　Ｂ・Ｃ区個別遺構図　ＳＨ28・31、ＳＨ26・30、ＳＨ25・33・32、ＳＨ59、ＳＨ72、ＳＨ73 …… 20
第15図　Ｃ・Ｄ・Ｅ区個別遺構図　ＳＨ43、ＳＫ44、ＳＨ38、ＳＨ53、ＳＨ58、ＳＨ49、ＳＨ63・64・69・70 …… 21
第16図　辻ノ内遺跡調査区全体図、土層図 …… 22
第17図　出土遺物① …… 28
第18図　出土遺物② …… 29
第19図　出土遺物③ …… 30
第20図　出土遺物④ …… 31
第21図　出土遺物⑤ …… 32
第22図　出土遺物⑥ …… 33
第23図　出土遺物⑦ …… 34
第24図　小社遺跡の遺構分布 …… 43
第25図　遺跡周辺の地形（1947年米軍撮影） … 44

表目次

第１表　範囲確認調査一覧表 …… 2
第２表　遺構一覧表 …… 23・24
第３表　遺物観察表 …… 35～41

写真図版一覧

・写真図版１（Ａ区）
Ａ区東半、Ａ区西半、Ａ区東端
・写真図版２（Ａ区）
ＳＨ１・５、ＳＺ２底面、ＳＨ６・36、ＳＫ11・ＳＨ13検出状況、ＳＫ７・８、ＳＨ12、ＳＨ13
・写真図版３（Ｂ区）
Ｂ区南半、Ｂ区北半、ＳＨ19・20・35、ＳＨ22・34
ＳＤ27
・写真図版４（Ｂ区）
ＳＨ25・32・33、同土層、ＳＨ28・31
ＳＨ26・30、同遺物出土状況
・写真図版５（Ｃ区）
Ｃ区東半、ＳＤ55、ＳＨ59、ＳＨ63・64
・写真図版６（Ｃ区）
Ｃ区西半、ＳＨ58、ＳＺ62・ＳＨ69・70、ＳＫ65、ＳＨ72、ＳＨ73
・写真図版７（Ｄ区）
Ｄ区西半、ＳＨ43、同被熱痕、ＳＫ44、ＳＫ48・ＳＨ49、Ｄ13-Pit1
・写真図版８（Ｄ区・Ｅ区）
Ｄ区東半、Ｅ区南半、Ｅ区北半、ＳＨ38、ＳＤ40
・写真図版９（出土遺物①）
・写真図版10（出土遺物②）
・写真図版11（出土遺物③）
・写真図版12（出土遺物④）

Ⅰ 前 言

1．調査に至る経緯

遺跡が所在する一級水系宮川の左岸は、三重県中・南勢部の１市４町（伊勢市・多気町・明和町・大台町・玉城町）にまたがる優良農業地帯である。その大半は台地上にあり、主要水源である宮川より高所に農地が存在するため、宮川用水の整備による安定的かつ効率的な水利用・管理が不可欠となっている。近年は、県営・団体営の支線・末端水路の整備が各所で進められている。

発掘調査原因の農業用アスベスト対策事業は、昭和30年代から50年代にかけて農業用水管に採用された石綿セメント管に起因する農業者等への被害を未然に防止するため、石綿を含有しない製品への更新整備を行うものである。令和２年度の工事が両遺跡内に及んだため、範囲確認調査ののち発掘調査を実施することとなった。

2．調査の経過

（1）範囲確認調査

範囲確認調査は新管埋設箇所を対象に、管路20m毎に１m×４mの調査坑を設置し、計32箇所（小社遺跡29ヶ所、辻ノ内遺跡３ヶ所）実施した（第１図）。小社遺跡は平成30年９月19日から28日、辻ノ内遺跡は平成30年９月19日に実施した。その結果、事業地の大半で遺構・遺物が確認された（第１表）。

なお、辻ノ内遺跡は当初、伊勢市まこも遺跡として調査にあたったが、事業地は玉城町域であったため、新たに辻ノ内遺跡として登録することにした。

（2）調査次数と調査の方法

小社遺跡の調査次数は、昭和57年度の玉城町調査を第１次とし、今回の調査を第２次調査とした。なお、令和２年度には別途、宮川用水幹線を対象とした第３次調査が実施されている（第２図）。

調査区は直線区間ごとにA～E区と呼称した（第２図）。調査地は町道内であったため、A・B・E区は道路を通行止め、交通量の多いC・D区は片側交互通行で一定スパンごとに掘削と埋め戻しを繰り返しながら調査を進めた。地元との水利調整により９月30日から表土掘削を開始し、令和２年１月24日に終了した。堆積層は重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。

遺構実測は調査員による手測りである。遺構検出段階は５mごとに設定した小グリッド単位の1/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに1/100の遺構配置図を作成した。遺構平面図は1/20、土層断面図は1/20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。これらの図面・現場作業日誌は当センターで保管している。写真はデジタルカメラで撮影した。

遺構番号は通し番号とし、ピットはグリッド別の通し番号である。報告書作成にあたり遺構番号の加除訂正が若干生じたが、基本的には調査時のものをそのまま用いている。

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、調査区・グリッドごとに取りあげた。整理作業終了後は報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と未掲載遺物（B遺物）に区分して保存した。

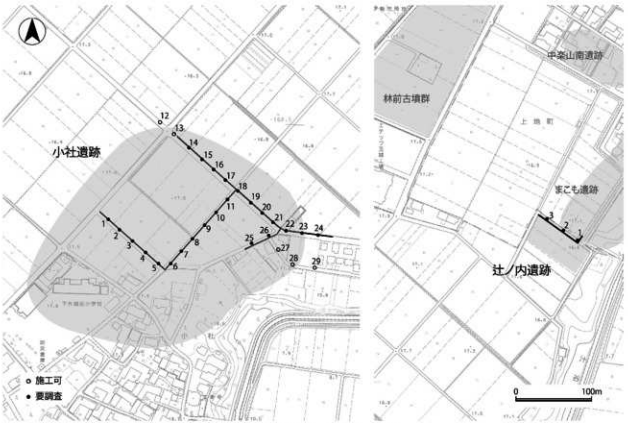
3．文化財保護法にかかる諸手続

調査に伴う法規上の手続は以下のとおりである。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項
（土木工事等のための発掘に関する通知）
・平成30年８月３日付、勢農第3207号
（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」

②文化財保護法第100条第２項
（文化財の発見・認定通知）
・令和２年３月26日付、教委第12－4425号
（伊勢警察署長あて県教育長通知）
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

③文化財保護法第99条（発掘調査着手報告）
・令和元年９月25日付、教理第185号
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」



第１図　範囲確認調査位置図（1:5,000、三重県共有デジタル地図に加筆）

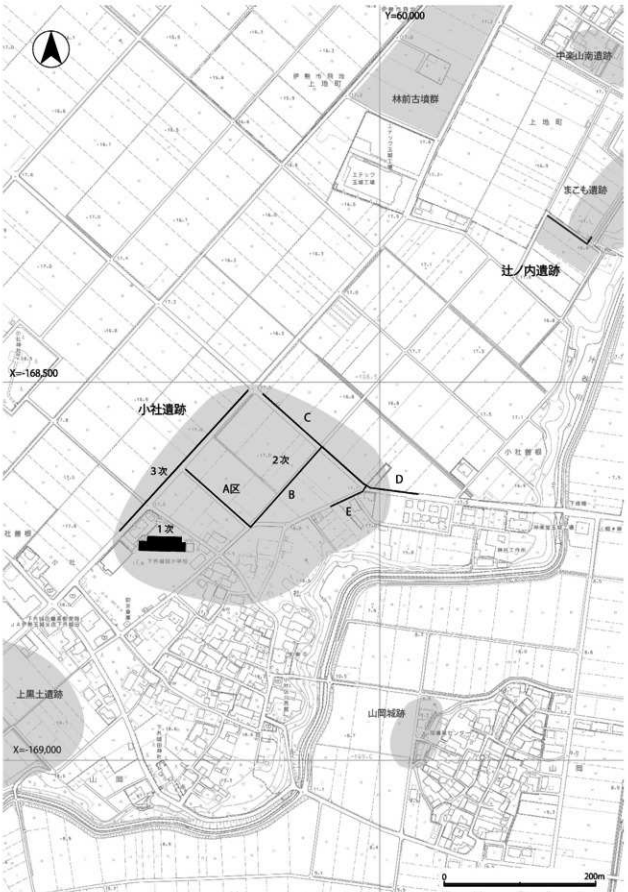
第１表　範囲確認調査一覧表

①小社遺跡

調査坑	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物
1	15	85	ピット	土師器
2	25	75	ピット	土師器
3	15	—	なし	土師器
4	15	80	ピット	土師器
5	25	60	溝	土師器・陶器
6	—	—	なし	なし
7	35	—	なし	土師器
8	45	75	ピット	土師器
9	40	55	ピット	土師器
10	35	70	ピット	土師器
11	—	—	なし	なし
12	—	—	なし	なし
13	—	—	なし	なし
14	80	150	竪穴住居？	土師器
15	85	115	ピット	土師器
16	85	125	ピット	土師器・須恵器
17	80	100	ピット	土師器
18	80	125	竪穴住居または溝	土師器
19	65	140	ピット	土師器
20	65	110	溝・ピット	土師器・須恵器
21	50	80	土坑・ピット	土師器・須恵器
22	—	—	なし	なし
23	80	95	土坑	土師器
24	85	130	溝	土師器・山茶碗
25	40	105	ピット	土師器
26	70	105	ピット	土師器
27	—	—	なし	なし
28	—	—	なし	なし
29	30	—	なし	土師器

②辻ノ内遺跡（まこも遺跡）

調査坑	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物
1	—	50	ピット	なし
2	—	50	ピット	土器片
3	—	—	なし	土器片



第２図　小社遺跡位置図（1:5,000）

Ⅱ　位置と環境

当地付近の地理的・歴史的環境は、近年の三重県埋蔵文化財センターの発掘調査報告書[1]で繰り返し詳述しているため、今回の調査に関連する事項に絞り、概略を示すにとどめたい。

小社遺跡（1）の所在する度会郡玉城町小社曽根は、三重県南勢地方、宮川左岸の低平な段丘上に位置する。遺跡の東側は段丘崖で、低地（氾濫原）との比高差は約7～10mである。俗に「湯田野」と呼ばれるこの段丘上には、上黒土遺跡（4）、中楽山遺跡（19）、林前古墳群（20）などの遺跡が、段丘崖付近に点在している。条里制を暗示する地名もわずかにみられるが、条里制の遺構は遺存していない。段丘崖に沿って、宮川支流の汁谷川が北東へ流れ、宮川との間に氾濫原が広がる。

小社遺跡では、第1次調査で主に弥生時代終末期の竪穴住居が20棟以上発見されており、別途実施した第3次調査でも数棟の竪穴住居を確認している。また、旧保育所（現在の下外城田小学校付近）の北側で、古墳時代前期後半～末の石槨が出土したとされる[2]。湯田野付近では傑出した古墳時代前半期の首長墓が確認できないなか、首長層の動向を知る上で重要な遺物である。

弥生時代の集落は、中期の上地山遺跡、終末期を中心とする野篠里中遺跡、中楽山遺跡、仲垣内遺跡などで竪穴住居等が確認されている。

古墳時代の集落は、赤垣内遺跡、仲垣内遺跡などがある。集落・墳墓とも、古墳時代前半期のものはごく限られている中で、小社遺跡は広範囲で竪穴住居が確認されており、当該期の南勢地域を代表する集落のひとつといえよう。

古代には、上黒土遺跡で若干奈良時代の遺構・遺物が認められる。アレキリ遺跡（5）・との山遺跡（6）では、縄文時代の土坑や奈良時代の竪穴住居、平安時代の緑釉陶器などが出土した。

汁谷川と宮川に挟まれた段丘上には、中世に神宮祭主（岩出祭主）の居館が置かれたとされ、岩出遺跡群（8）が所在する。小社遺跡付近でも、神宮関連文書（「二所太神宮例文」）の祭主次第に「小社輔経」とあり、延久3年（1071）より在任十年とされる祭主大中臣輔経が館を構えたと推測されている[3]。小社遺跡の第1次・第3次調査では、区画溝とみられる大溝や中世の掘立柱建物が確認され、上黒土遺跡でも区画溝や庇付建物、白磁椀などがみられた。これらは祭主の居館との関連も想起される。

室町時代以降は、岩出周辺が南北朝期の合戦の舞台となり、戦国期には岩出城跡（7）が置かれた。

近世には、小社村は和歌山藩田丸領に属し、明治初めには家数28、人数118人という[4]。湯田野には松林や雑木林の原野が広がっており、小社遺跡の付近でも「小社山」とよばれる微高地の開墾が進んだとされ、遺跡西方の「雨の宮」（現在の小社神社付近）では、松林を開墾して畑地に変えたという[5]。こうした局所的な高まりの存在は、後述する遺跡付近の基盤層の動向からもうかがえる（Ⅲ章基本層序）。小社一帯は明治時代まで桑畑が広がっており、水田耕作の開始は近年の宮川用水の敷設以降のことである。

註

（1）三重県埋蔵文化財センター『との山・アレキリ遺跡』2018年/『上黒土遺跡発掘調査報告』2019年/『小社遺跡（第3次）発掘調査報告』2022年など。

（2）玉城町『玉城町史』上巻、1995年。

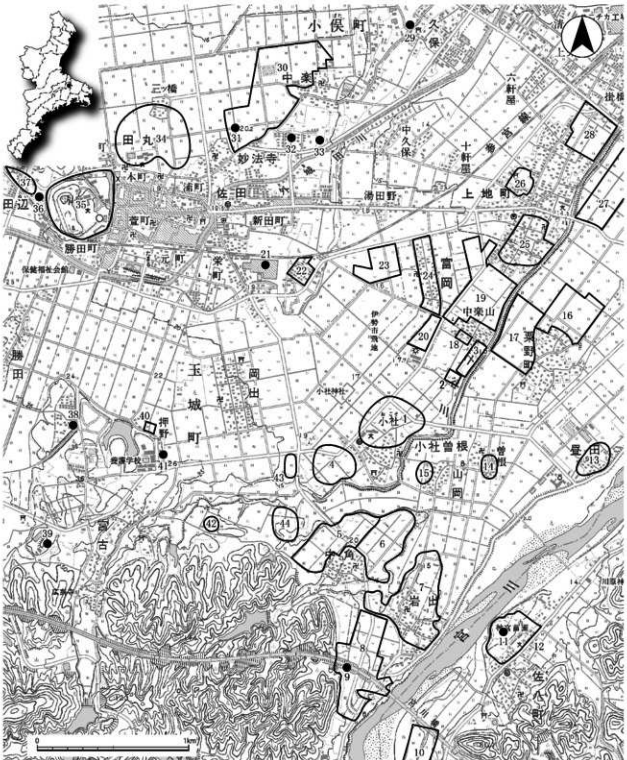
なお、町史では石槨の出土地点（地図）と文章の内容に齟齬があり、地図では現在の下外城田保育所の北側（上黒土遺跡の北側）とするのに対し、文章では、「小学校北側に隣接していた旧保育所の北側」から出土したとする。

戦前の陸軍地図などから、「小学校北側に隣接していた旧保育所」は、現在の下外城田小学校の位置にあたることが知られるので、本報告書では、現在の下外城田小学校の北側を石槨の出土地点としている。

（3）註2前掲。

（4）平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。

（5）註2前掲。



1. 小社　2. 辻ノ内　3. まこも　4. 上黒土　5. アレキリ　6. との山　7. 岩出城跡　8. 岩出遺跡群　9. 蛟山古墳群　10. 中ノ垣外
11. 藤波古墳群　12. 佐八藤波　13. 昼田北遺　14. 里内　15. 山岡城跡　16. 栗野北　17. 汁谷川東　18. 中楽山南　19. 中楽山　20. 林前古墳群
21. 佐田山古墳群　22. 銚子口　23. 上御起　24. 富岡里浦　25. 上遺　26. 下中野　27. 奥の浦　28. 野垣内　29. 野田古墳　30. 田丸道　31. 塚田古墳
32. 茶臼塚古墳群　33. 豆塚古墳群　34. 寺田　35. 田丸城跡　36. 波瀬A　37. 波瀬B　38. 振塚古墳　39. 矢塚古墳群　40. 鉄砲塚　41. 鉄砲塚古墳群
42. 上地山　43. 杉山　44. 明豆

第３図　遺跡分布図（1:25,000、平成14年国土地理院数値地図1:25,000に加筆）

Ⅲ 遺 構

1．基本層序と微地形

小社遺跡の基本層序は、Ⅰ：アスファルト・砕石等〔道路建設時の盛土〕、Ⅱ：黒褐色系シルト〔旧耕土、弥生時代～中世遺物包含〕、Ⅲ：黄褐色系シルト～極細砂〔基盤層、段丘堆積物〕の順で、すべての調査区においてⅢ層上で遺構検出を行った（第12図土層柱状図）。

Ⅱ層は黒ボク土由来で、地点により厚さが大きく異なり、耕地開発により階段状を呈するところもある。Ⅲ層は上部が粘土質シルトまたは極細砂で、下部は砂礫となる。Ⅲ層の地盤高は、A区東～B区中央付近が最も高く、段丘崖に近い遺跡北東へ向かって低くなる（第12図）。Ⅱ層の厚さもこれに対応しており、B区北側はⅡ層がほとんど削平され、Ⅲ層下位の砂礫層が表出していたことから、遺構も一定削平されたと考えられる。

調査中は各所で段状の落ち込みを検出した。耕作痕のほか、竪穴住居等の遺構の重複が含まれる可能性があるが、調査区の狭小さから遺構の切り合いを厳密に把握することができなかった箇所も多い。そうした地点は落ち込みとして一括掘削し、底面付近で壁周溝等の検出を試みている。竪穴住居の主柱穴も明らかにできたものはない。

今回の調査では、主に弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構を検出しているが、当該期の時代・時期区分についてはやや煩雑なことや、土器の時期比定の都合上[1]、濃尾平野の廻間Ⅰ・Ⅱ式併行を弥生時代終末期、廻間Ⅲ式併行を古墳時代前期として記述する。

2．A区

調査地の南西側、延長約115m、幅１mの調査区である（第４図）。東端付近では、過去に古墳時代前期後半～末の腕輪形石製品（石釧）が出土したと伝えられる（第Ⅱ章）。現道下約80cmで基盤層（明黄褐色シルト）に達し、この上面で遺構検出を実施した（第８図）。

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構は調査区の全域にみられ、調査区東側（A19～20グリッド）は奈良時代の竪穴住居等がみられる。

調査区中央（Ａ４～10グリッド）は段状の落ち込み（ＳＺ２）となっており、底面に炉跡や硬化面がみられたことから、複数の竪穴住居が存在した可能性が高いが、識別できたのはＳＨ６・36など一部に留まる。

ＳＨ１・５（第13図、写真図版２） ＳＨ１はA区北西端で検出した延長約５mの浅い落ち込みで、複数の竪穴住居の重複とみられる。底面で壁周溝を確認したことから、壁周溝内をＳＨ５とした。ＳＨ５は一辺約４m程度の竪穴住居とみられ、壁周溝は幅15cm、深さ約４cmが残存する。貼床は不明瞭で機能面の硬化も弱い。

遺物は全てＳＨ１として取り上げた。弥生時代終末期の土師器が出土している。

ＳＺ２（写真図版２） A区中央で延長25m、深さ約40cmを測る段状の落ち込みである。断面観察や底面の精査から、複数の竪穴住居の重複とみられ、明確なものはＳＨ６・ＳＨ36がある。その他、ＳＫ７～９などの屋内土坑の残欠とみられる土坑や、炉跡の残骸の被熱面などがみられた。

埋土中に多くの遺物が含まれていたが、表土掘削時に全体を重機で掘り下げたため、ＳＺ２としては取り上げていない。

ＳＨ６・ＳＨ36（第13図、写真図版２） Ａ７・８グリッド、ＳＺ２底面で壁周溝を検出した。ＳＨ６は一辺約４～５m、深さ40cm程度の竪穴住居と思われる。

ＳＨ36はＳＨ６と重複する建物で、壁周溝と南屑を検出した。ＳＨ６の前身建物とみられる。

ＳＫ７～ＳＫ９（写真図版２） ＳＨ６の北側で検出した直径50cm～１m、深さ約40cmの土坑である。本来は弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居に付属する屋内土坑などであったとみられる。高杯や台付甕、手焙形土器などが出土している。

ＳＫ９は長径50cm、深さ３cmの浅い凹みで、周囲が被熱しており、炉に伴う土坑かもしれない。

ＳＫ11（第13図、写真図版２）　Ａ区南東側、ＳＨ13の上面で検出した幅1.5m、深さ30cmの楕円形土坑である。埋土は炭・焼土を多く含む灰黄色シルトで、奈良時代の土師器が数多く出土している。竪穴住居廃絶時にカマドを解体したものか。

ＳＨ12（第13図、写真図版２）　Ａ区南東側、ＳＨ13に接する竪穴住居で、調査区内で幅3.5m、深さ40cmを測る。平面形は楕円ないし隅丸方形である。底面には貼床が薄くみられ、壁周溝は明確でなかった。奈良時代後半の土師器が出土している。

ＳＨ13（第13図、写真図版２）　ＳＨ12に隣接する竪穴住居で、一辺3.9m、深さ30cmを測る。中央に土坑（ＳＫ15）があり、貼床は場所により厚さが若干異なる。特に東側は砂利混じりで硬化していた。壁周溝は明確でなかった。遺物は出土していないが、ＳＨ12に関連した奈良時代の建物とみられる。

ＳＤ23　Ａ区南端（Ａ22）で検出した幅1.7m、深さ80cmの溝で、黒褐色のシルトで埋没する（第８図）。範囲確認調査時に大半を掘削しており、詳しい時期は不明である。

３．Ｂ区

調査地の中央、延長約141m、幅１mの調査区である（第５図）。現道下約90cmで基盤層（黄褐色砂質シルト～砂礫）に達したが、調査区南側は耕作により全体が削平され、中世までの遺物を含む落ち込みとなっていた（ＳＺ16・17）。このため、当該部分を除去したところで遺構を検出した（第９図）。ＳＺ17付近は奈良時代の竪穴住居、それ以北は弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構が主体となる。

北東側は基盤層下部の砂礫層が表出しており、微高地にあたるとみられる。そのため削平の度合いが大きく、遺構は底面付近が残るのみであった。

ＳＺ16　Ｂ６～９グリッドで確認した、延長約18m、深さ20cm前後の浅い落ち込みである。本来は遺構が存在した可能性もあるが、耕作により削平されたとみられる。

ＳＺ17　Ｂ10～13グリッドにみられるＳＺ16と同様の浅い落ち込みで、耕作痕とみられる。下面でＳＨ19など複数の竪穴住居を検出した。

ＳＨ19（第13図、写真図版３）　ＳＺ17下で検出した竪穴住居で、ＳＨ20に先行する建物である。南側に壁周溝があり、わずかに貼床もみられた。貼床から、ミニチュアの壺ないし甕（41）が出土した。

ＳＨ20（第13図、写真図版３）　ＳＺ17下で検出した竪穴住居で、ＳＨ19より後出の遺構である。壁周溝は確認できなかった。古代の土師器・須恵器片が出土しており、奈良時代の竪穴住居とみられる。

ＳＨ22・ＳＨ34（第13図、写真図版３）　２棟の竪穴住居の重複で、全体で幅４mを測る。ＳＨ22が後出で、幅約２mと住居としては小さく、床面付近の土坑などの一部が残存したものかもしれない。

ＳＨ34から弥生時代後期～終末期の高杯が出土している。

ＳＤ27（写真図版３）　Ｂ15グリッドで検出した幅50cm、深さ10cmの屈曲する溝である。遺物は出土していない。

ＳＨ28・ＳＨ31（第14図、写真図版４）　２棟の竪穴住居の重複で、全体で幅3.5mを測る。東側をＳＨ31としたが、幅1.5mと狭く、埋没単位の違いとみる方が良いかもしれないが、それぞれに貼床がみられる。西側壁周溝は断面で確認した。ＳＨ28から弥生時代終末期頃の高杯が出土している。

ＳＨ25・ＳＨ32・ＳＨ33（第14図、写真図版４）　Ｂ19・20グリッド付近は３棟の竪穴住居が重複しており、全体で3.7mを測る。範囲確認調査坑で一部を欠失したため、全体をＳＨ25として把握し、断面観察により３棟を識別した。中央のＳＨ33が最も新しいが、幅3.3mほどと小さい。ＳＨ25は幅約30cm、深さ５cmの壁周溝がみられた。

遺物はＳＨ25としてまとめて取り上げた。床面付近で出土したものはない。弥生終末期の高杯や小型器台がみられた。

ＳＨ26・ＳＨ30（第14図、写真図版４）　２棟の竪穴住居の重複で、全体で幅5.8m、深さ５～10cmを測る。屋内土坑ＳＫ74がある。ＳＨ26床面から弥生時代終末期の小型鉢、粗製の大型鉢、ＳＨ30から甕が出土している。

ＳＨ35（第13図、写真図版３）　ＳＨ20の東側でご

く一部を検出した遺構である。ＳＨ20と埋土の状況がよく似ることから竪穴住居と判断した。ＳＨ19等と同じく奈良時代のものか。

４．Ｃ区

調査地の北東、延長約178m、幅１mの調査区である（第６図）。現道路高から70㎝～１mで基盤層（にぶい黄褐色粘土質シルト）に達した。基盤層は南東側が砂礫、北側が粘土質シルトで、南側が微高地にあたるとみられる（第10・11図）。

他の調査区に比べると、平安時代、特に平安時代末の遺物が多く得られており、ピットも多くみられた。調査区北端に至ると遺構は希薄となる。

小地区（グリッド）は北西端をＣ１としたが、さらに北側を延伸する必要が生じたため、Ca～Cbグリッドを追加している。

ＳＫ52　Ｃ34・35グリッドで検出した直径約１m、深さ15㎝の不定形な土坑である。

ＳＨ53（第15図）　Ｃ32・33グリッド付近は、黒褐色土のピット状凹凸が多くみられた。このため、ＳＤ56を壁周溝とみて幅約5.5mの竪穴住居を復原した。基盤層は砂礫層で、加工面の凹凸は著しい。

弥生・古墳時代の土師器が出土している。

ＳＺ54　Ｃ30・31グリッド、ＳＤ55の付近にみられた浅い落ち込みである。弥生・古墳時代の遺物がみられたことから、竪穴住居の重複かもしれない。

ＳＤ55（写真図版５）　Ｃ30・31グリッドで検出した幅約50㎝、深さ約50㎝の溝で、Ｚ字状にクランクする。山茶碗・土師器など、平安時代末～鎌倉時代の遺物が出土した。

ＳＤ57　Ｃ33グリッドで検出した幅約60㎝、深さ15㎝の浅い溝である。

ＳＨ58（第15図、写真図版６）　Ｃ28・29グリッドで検出した竪穴住居で、一辺約3.8m、深さ約30㎝を測る。礫混じりの貼床が全面にみられ、所々で不定形な溝状となる（ＳＤ61）。壁周溝は明確でない。

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物が主体であるが、底面付近から奈良時代の甕が出土している。

竪穴住居が深く、溝状の貼床をもつ点はＳＨ12・13などと共通していることから、奈良時代の竪穴住居の可能性を考えておきたい。

ＳＨ59（第14図、写真図版５）　Ｃ27グリッド付近で一部を検出した竪穴住居である。北側はＳＺ62に切られ、大半が失われている。深さ約30㎝で、床面は硬化していた。南東側に直径約60㎝の屋内土坑ＳＫ60がみられる。古墳時代前期の土師器壺が出土している。

ＳＺ62　Ｃ23・24グリッド付近で確認した落ち込みで、ＳＨ69・70など竪穴住居数棟が重複している。古墳時代前期を中心に、弥生時代後期や平安時代の遺物がみられた。

ＳＨ63・64（第15図、写真図版５）　Ｃ21・22グリッドで検出した竪穴住居である。ＳＨ63は幅約3.6m、深さ約15㎝で、貼床は明確でない。東側には壁周溝（ＳＤ68）がみられた。

ＳＨ64はＳＨ63に先行し、それよりやや浅い竪穴住居である。少なくとも幅４m程度の規模のものであろう。西側に壁周溝（ＳＤ66）がみられた。

両遺構とも、弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器が出土している。

ＳＫ65（写真図版６）　Ｃ19グリッド、約2.5m、深さ５㎝の不定形な土坑である。平安時代の灰釉陶器や山茶碗が出土した。

ＳＫ67　Ｃ20グリッド、幅2.6m、深さ10～20㎝の隅丸方形の土坑で、中央が下水管の撹乱により失われているため、詳細は不明である。

ＳＨ69・70（第15図、写真図版６）　Ｃ23・24グリッド、ＳＺ62完掘後、底面で認識した古墳時代前期の竪穴住居である。貼床の切り合いから、北西側をＳＨ69、南東側をＳＨ70とした。ＳＨ70が後出の建物である。

ＳＨ69は幅６mであるが、東側に硬化した貼床がみられ、西側には壁周溝状の凹みがあることから、さらに２棟程度の竪穴住居に分離できる可能性が高いものの、断面観察では識別できなかった。

ＳＨ70は幅約3.7m、深さ約20㎝で、両側にごく浅い、幅約20㎝の壁周溝、中央に深さ約10㎝の浅い土坑がみられる。

出土遺物はＳＺ62として取り上げており、ＳＨ70識別後、Ｓ字甕が出土している。

ＳＫ71　Ｃ16グリッドで検出した、直径約１mの楕

円形土坑である。

ＳＨ72（第15図、写真図版６）　Ｃ11・12グリッドで検出した竪穴住居で、幅約４ｍ、深さ50㎝を測る。前身ないし重複建物が東側にある。貼床は局所的な溝状で、特に北側が硬化していた。壁周溝は明確でない。弥生時代終末期の有稜高杯が出土しているものの、深さがあり貼床が溝状を呈する竪穴住居は奈良時代のものが多く、奈良時代の可能性も捨てきれない。

ＳＨ73（第15図、写真図版６）　Ｃ３・４グリッドで検出した幅約４ｍ、深さ15～20㎝の方形の竪穴住居である。機能面の硬化は不明瞭で、壁周溝もみられなかった。弥生時代終末期頃の土師器が出土した。

５．Ｄ区

遺跡の東端、延長約73m、幅１ｍの調査区である（第７図）。北側は工事幅が広がり、トレンチ幅２ｍとなる。

東側は現道路下1.７ｍで基盤層（にぶい黄褐色粘土質シルト）に達し、主にピットを確認した。Ｅ区に近い西側は現道下1.１ｍで砂礫層となり、西側が微高地にあたるとみられる（第11図）。

弥生時代終末期～古墳前期の遺構は調査区の全域にみられるが、西側（Ｄ11～15グリッド）には掘立柱建物のやや大型のピットがみられる。

ＳＤ42　Ｄ12グリッドで検出した幅約80㎝、深さ約20㎝の不定形な溝である。土師器片が出土した。

ＳＨ43（第15図、写真図版７）　Ｄ８・９グリッドで検出した幅4.３m、深さ25㎝の竪穴住居で、両側に浅い壁周溝（ＳＤ45）がみられる。

基盤層は礫が多く含まれ、加工面は凹凸が著しい。機能面の硬化は明確でなかったが、基盤層の状況から埋土とほぼ同質の黒色土で、加工面の凹凸を埋めるような貼床があったとみられる。

中央やや西寄りに直径約40㎝の焼土（被熱面）があり、炉跡と考えられる。

埋土から古墳時代前期の土師器片が数多く出土しており、高杯（87）は床面から出土した。

ＳＫ44（第15図、写真図版７）　Ｄ11・12グリッドで検出した直径約80㎝、深さ約30㎝の円形土坑である。埋土は黒褐色シルト単層である。

底面よりやや上位から弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器が出土した。このうち、内面にベンガラが付着した有段口縁鉢（103）が特筆される遺物である。

ＳＤ46　Ｄ５グリッドで検出した幅60㎝、深さ約20㎝の溝で、埋土の特徴から、中世の遺構と推測される。

ＳＫ48（第15図、写真図版７）　Ｄ５グリッドで検出した幅約２ｍ、深さ約40㎝の土坑で、ＳＨ49より後出の遺構である。竪穴住居の一部の可能性もあろう。弥生～古墳時代の土師器の小型鉢が出土しているが、混入の可能性が高い。

ＳＨ49（第15図、写真図版７）　Ｄ５グリッドで検出した幅3.５m以上の方形の竪穴住居である。深さ約15㎝を測る。幅約20㎝の壁周溝（ＳＤ51）がみられた。弥生土器壺片が出土している。

ＳＫ50　Ｅ区との境界で検出した直径1.２m以上の土坑である。大半が攪乱を受け、詳細は不明である。

その他ピット（写真図版７）　Ｄ13-Ｐit１は掘方直径約70㎝、深さ約40㎝の大型ピットで、柱痕は直径30㎝を測る。埋土からＳ字甕（224）が出土しており、古墳時代前期の建物ピットとみられる。

付近にやや大型の掘立柱建物が存在した可能性があろう。

６．Ｅ区

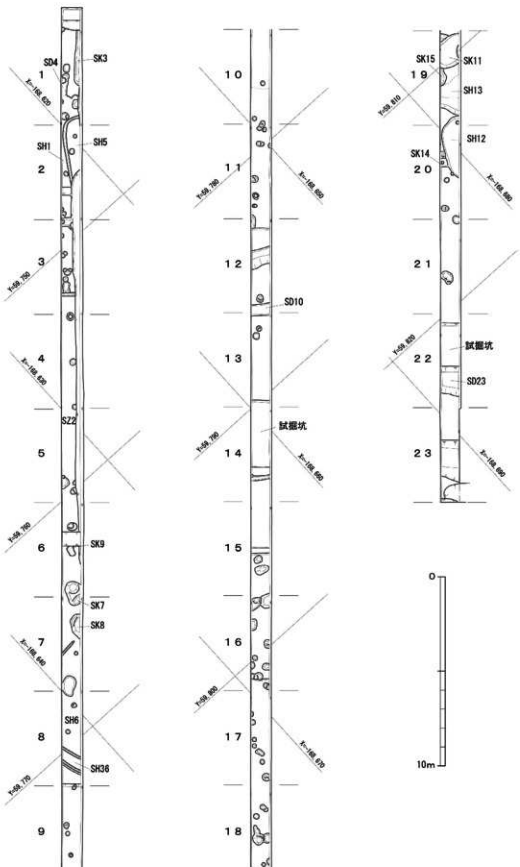
調査地の南側、延長約47m、幅１ｍの調査区である（第７図）。現道下70㎝～1.１ｍで基盤層に達し（第12図）、古代の竪穴住居や溝などが確認された。所々に埋設管等の構造物があり、遺構の残りは悪い。

ＳＤ37　Ｅ９グリッドで検出した幅約60㎝、深さ約10㎝、延長３ｍの浅い溝である。

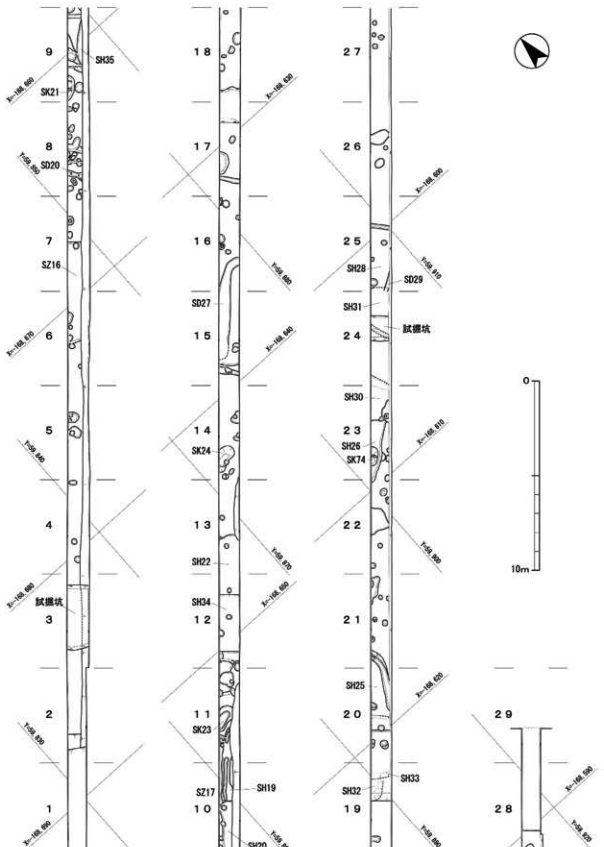
ＳＨ38（第15図、写真図版８）　Ｅ11グリッドで検出した幅約４ｍ、深さ約20㎝の隅丸方形を呈する竪穴住居である。貼床等の施設は明確でない。

平安時代の土師器杯が出土しており、平安時代の竪穴住居の可能性がある。

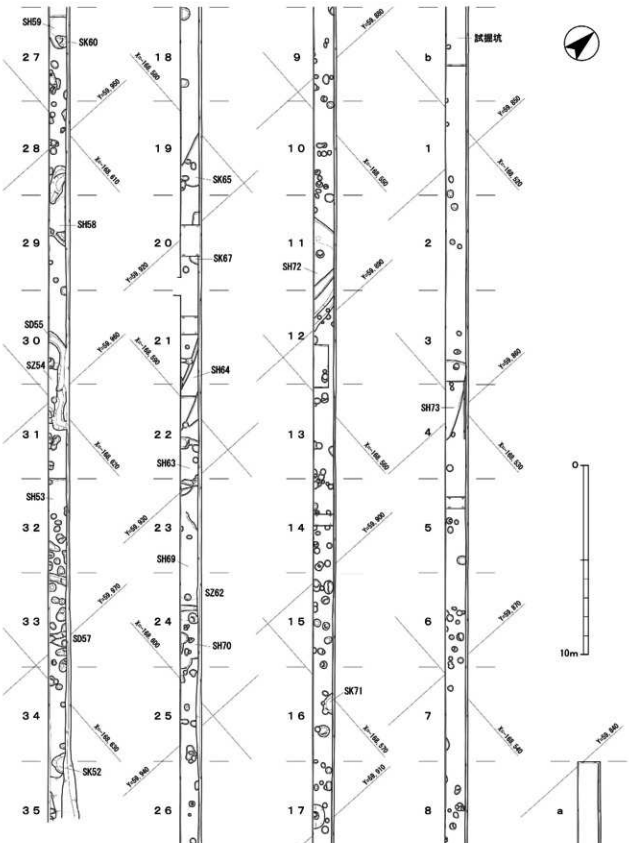
ＳＤ39　Ｅ５グリッド、上面幅約1.５m、深さ30㎝



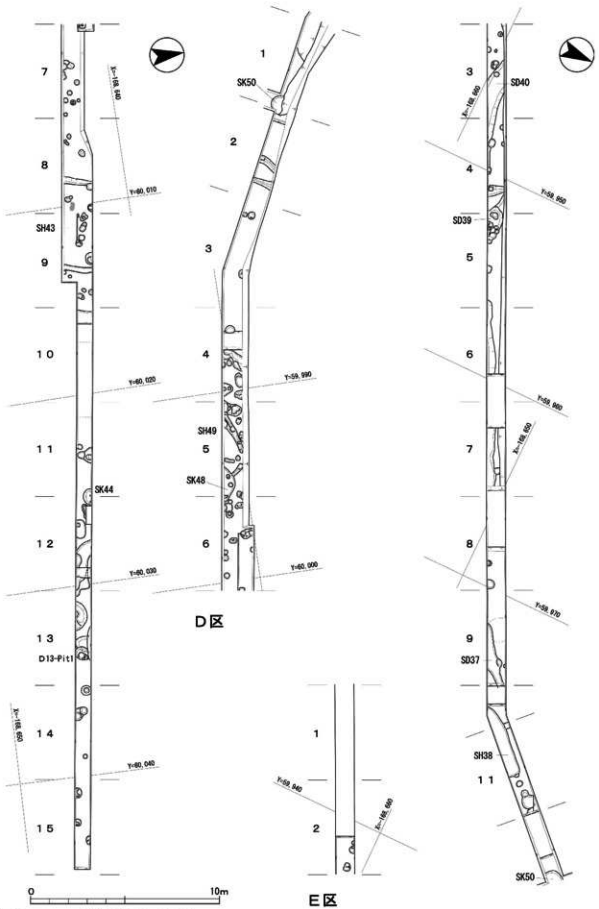
第４図　Ａ区遺構全体図（1:200）



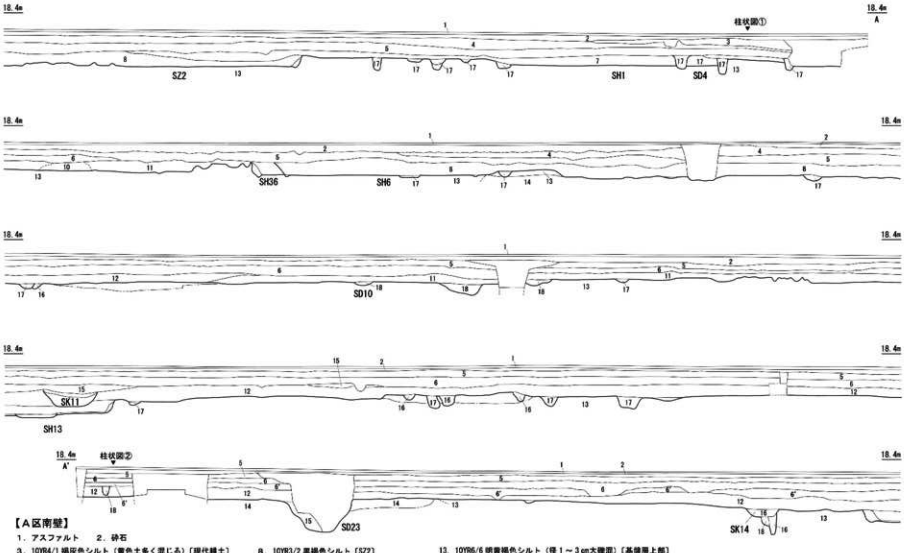
第５図　Ｂ区遺構全体図（1:200）



第６図　Ｃ区遺構全体図（1:200）



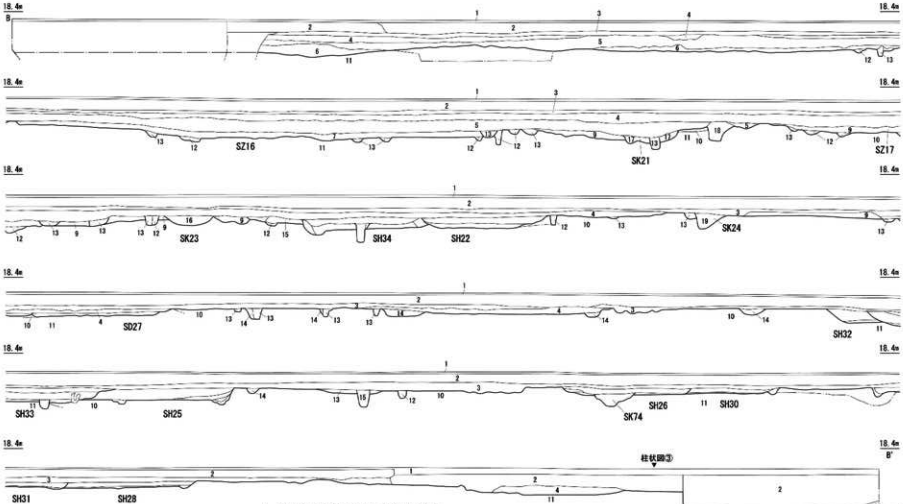
第７図　Ｄ・Ｅ区遺構全体図（1:200）



【A区南壁】

1．アスファルト　2．砕石
3．10YR4/1 褐灰色シルト（黄色土多く混じる）〔現代耕土〕
4．10YR4/2 灰黄褐色シルト（黄色土多く混じる）〔現代耕土〕
5．10YR3/1 黒褐色シルト（礫多い、現代ゴミ含む）〔現代耕土〕
6．10YR4/1 褐灰色シルト（径1～2cm大礫多い）〔旧耕土〕
6'．10YR3/1 黒褐色シルト〔旧耕土〕
7．10YR3/2 黒褐色シルト（土器等包含）
8．10YR3/2 黒褐色シルト〔SZ2〕
9．10YR5/2 灰黄褐色シルト〔SH壁周溝？〕
10．10YR5/2 灰黄褐色シルト（炭・焼土多い）〔カマド焼欠か〕
11．10YR3/1 黒褐色シルト
12．10YR2/1 黒色シルト
13．10YR6/6 明黄褐色シルト（径1～3cm大礫混）〔基盤層上部〕
14．10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫（礫径3～5cm）〔基盤層下部〕
15．10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（径5cm大礫多）〔SD23〕
16．10YR2/1 黒色シルト〔ピット等埋土〕
17．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色土ブロック混）〔ピット等埋土〕
18．10YR4/2 灰黄褐色シルト〔ピット等埋土〕

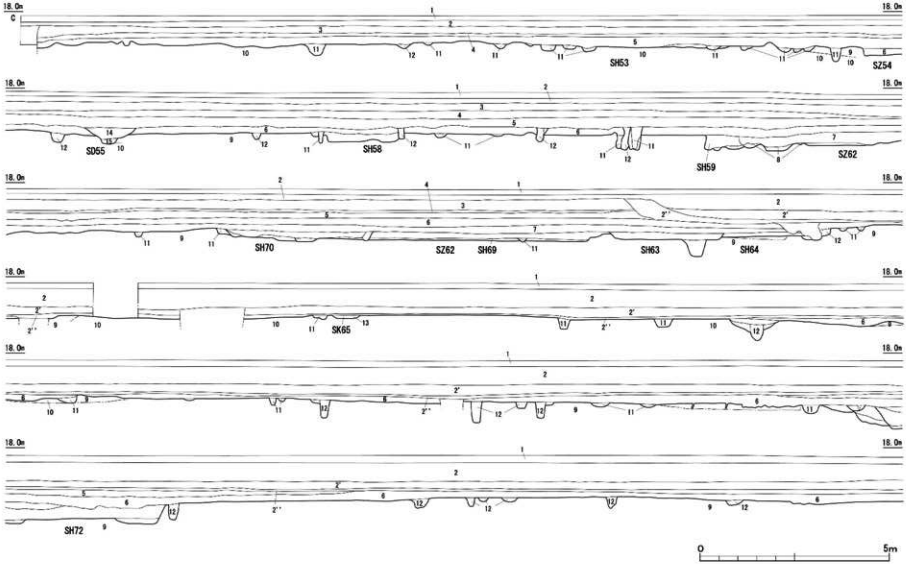
第８図　Ａ区南壁土層断面図（1:100）



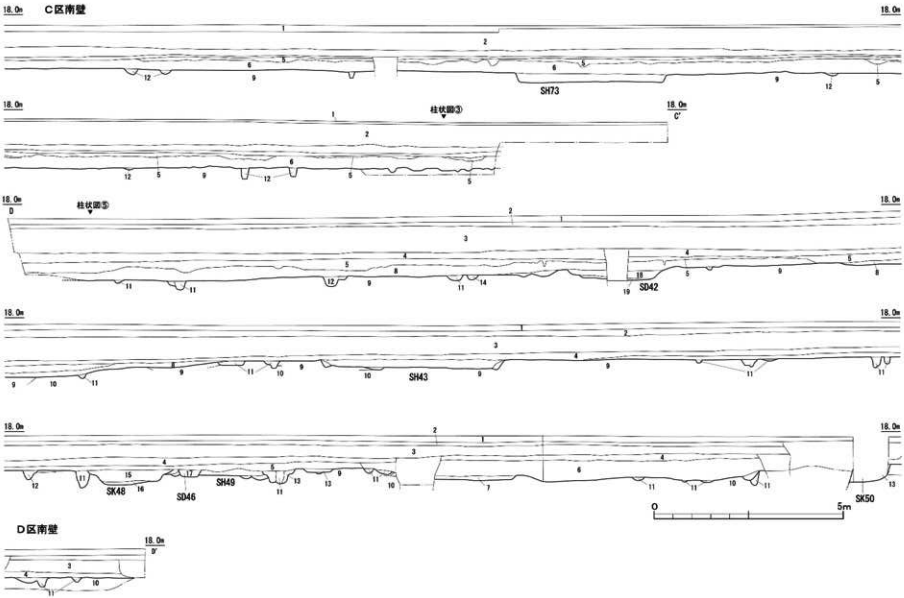
【B区西壁】

1．アスファルト　　2．砕石等
3．10YR4/1 褐灰色シルト（ゴミ混じる）〔現代耕土〕
4．10YR3/1 黒褐色シルト（径２～５cm大礫多）〔旧耕土〕
5．10YR3/1 黒褐色シルト（微少）〔炭含～弥生末遺物包含〕
6．10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫～砂質シルト（黒褐色シルト 50%）
7．10YR3/1 黒褐色シルト（径３～５cm大礫多）〔SZ16〕
8．10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト～極細砂〔SZ16〕
9．10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）〔SZ17 等〕
10．10YR5/6 黄褐色砂質シルト～極細砂（径２～５cm大礫まばら、生成多い）〔基盤層上部〕
11．10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（巾大礫多）〔基盤層下部〕
12．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30 ～ 50%）〔ピット等〕
13．10YR3/1 黒褐色シルト〔ピット等〕
14．10YR4/2 灰黄褐色シルト〔ピット等〕
15．10YR2/1 黒色シルト〔ピット等〕
16．10YR2/1 黒色シルト〔SK23〕
17．10YR4/2 灰黄褐色シルト（極細砂混）〔SK21〕
18．10YR4/2 灰黄褐色シルト〔風倒木か〕
19．10YR4/2 灰黄褐色シルト〔SK24〕
20．10YR3/1 黒褐色砂質シルト（径１～２cm大礫多）〔SD27〕

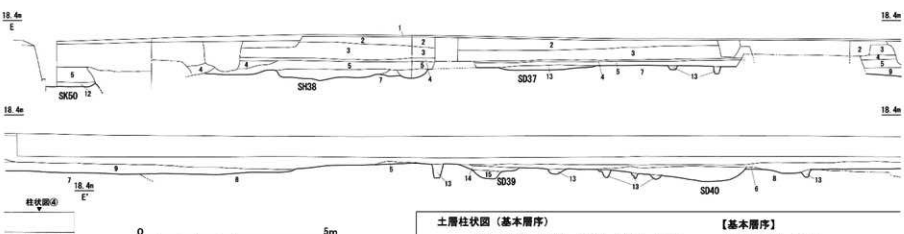
第９図　B区西壁土層断面図（1:100）

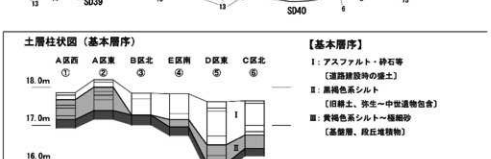


第10図　C区南壁土層断面図①（1:100）



第11図　C区南壁②、D区南壁土層断面図（1:100）





【基本層序】

Ⅰ：アスファルト・砕石等
（道路建設時の盛土）

Ⅱ：黒褐色系シルト
（旧耕土、弥生～中世遺物包含）

Ⅲ：黄褐色系シルト～極細砂
（基盤層、段丘堆積物）

【C区南壁】

1. アスファルト
2. 砕石等
3. 橙色粘土＋褐灰色砂礫（盛土）
4. 10YR4/1 褐灰色砂礫（盛土）
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（径２～５cm大礫まばら）（旧耕土）
6. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%、締まりやや弱い）（SZ54 等）
7. 10YR2/1 黒色シルト（５cm大黄褐色シルトブロック 5%）（旧耕土）
8. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（黄褐色シルト 50%）（旧床土か）
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト（基盤層上部）
10. 10YR7/6 明黄褐色砂礫（基盤層下部）
11. 10YR3/2 黒褐色シルト（ピット等）
12. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）（ピット等）
13. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（径２～５cm大礫まばら）（SK65）
14. 10YR3/1 黒褐色シルト（SD55）
15. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）（SD55）

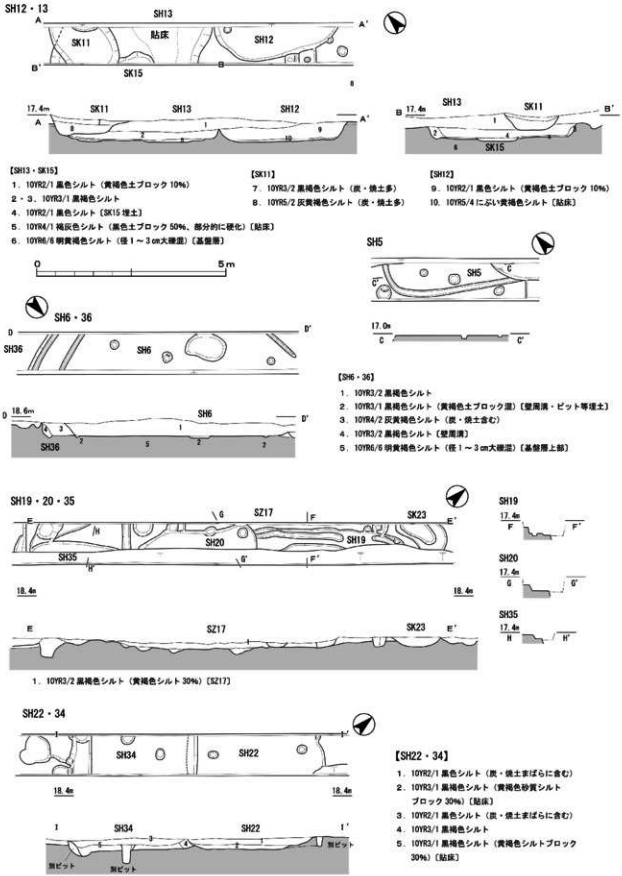
【D区南壁】

1. アスファルト
2. 砕石等
3. 橙色粘土（現代盛土）
4. 10YR4/1 褐灰色細砂（現代盛土）
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（土器片まばら）（旧耕土）
6. 10YR3/1 黒褐色シルト（旧耕土）
7. 10YR2/1 黒色シルト（黄褐色シルトがラミナ状にみられる）（旧床土か）
8. 10YR2/1 黒色シルト（上方からの生痕著しい、径３～５cm灰黄褐色シルト 30%）
9. 10YR3/3 暗褐色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（基盤層上部）
10. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫（径５～ 10 cm大礫多）（基盤層下部）
11. 10YR3/1 黒褐色シルト（ピット等）
12. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）（ピット等）
13. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（ピット等）
14. 10YR2/1 黒色シルト（ピット等）
15. 10YR3/1 黒褐色シルト（SK40）
16. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）（SK48）
17. 10YR4/1 褐灰色シルト（SD46）
18. 10YR2/1 黒色シルト（SD42）
19. 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）（SD42）

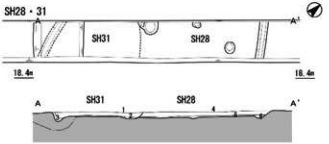
【E区南壁】

1. アスファルト
2. 砕石等
3. 橙色粘土（現代盛土）
4. N3 暗灰色シルト（現代ゴミ含）（旧表土・盛土）
5. 10YR3/1 黒褐色シルト（径２～５cm大礫多）（旧耕土、中世遺物包含）
6. 10YR3/2 黒褐色シルト
7. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫（径５～ 10 cm大礫多）（基盤層）
8. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト（径２～５cm大礫まばら）（基盤層）
9. 10YR2/1 黒色シルト（締まりなし）（溝）
10. 10YR3/1 黒褐色シルト（径２～５cm大礫多）（SD37）
11. 10YR4/1 褐灰色シルト（径５～ 10 cm大礫多、締まりなし）（SD40）
12. 10YR3/1 黒褐色シルト（SK50）
13. 10YR3/1 黒褐色シルト（径２～５cm大礫多）（ピット等）
14. 10YR3/1 黒褐色シルト（SD39）
15. 10YR2/1 黒色シルト（黄褐色シルト 20%）（SD39）

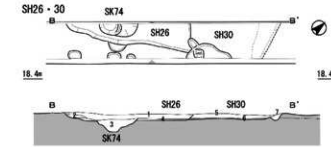
第12図　E区南壁土層断面図（1:100）、基本土層柱状図（1:100）



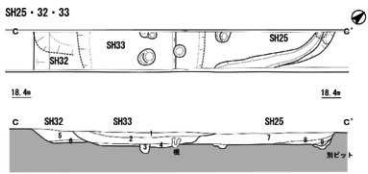
第13図　A・B区個別遺構図（1:100）



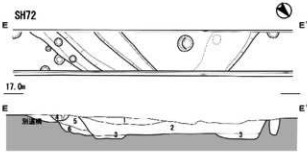
【SH28・31】
1．10YR2/1 黒色シルト
2．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）〔貼床〕
3．10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%）〔壁周溝〕
4．10YR3/1 黒色シルト
5．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%、よく締まる）〔貼床〕
6．10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%）〔壁周溝〕



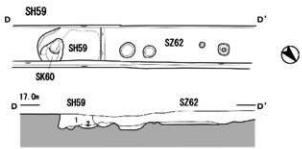
【SH26・30】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（5より黒色強い）
2．10YR3/2 黒褐色砂質シルト（黄褐色シルト 30%）
3．10YR3/2 黒褐色砂質シルト（SK74）
4．10YR3/1 黒褐色砂質シルト（黄褐色シルト 30%）〔貼床〕
5．10YR3/1 黒褐色シルト（径 1～2 cm大礫まばら）
6．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 50%、よく締まる）〔貼床〕
7．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）〔壁周溝〕



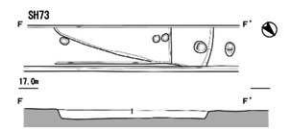
【SH25・32・33】
1．10YR3/1 黒褐色シルト
2．10YR2/1 黒色粘土質シルト
3．10YR3/1 黒褐色シルト（やや砂質）〔ピット〕
4．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色砂質シルトブロック 30%）〔貼床〕
5．10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（炭・焼土まばら）
6．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色砂質シルトブロック 30%）〔貼床〕
7．10YR3/2 黒褐色砂質シルト（炭・焼土まばら）
8．10YR3/2 黒褐色砂質シルト（黄褐色砂質シルト 10%）
9．10YR4/2 灰黄褐色極細砂



【SH72】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）
2．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%）
3．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 50%）〔局所的な貼床〕
4．10YR3/1 黒褐色シルト（ピット）
5．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 40%）
6．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 40%）

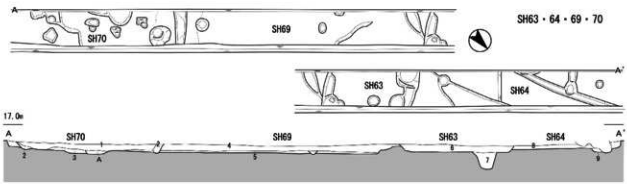


【SH59】
1．10YR3/1 黒褐色シルト
2．10YR4/2 灰黄褐色シルト（黄褐色シルト 10%）



【SH73】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%）

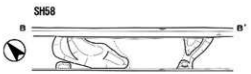
第14図　B・C区個別遺構図（1:100）



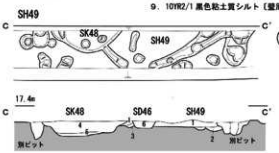
【SH70】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（炭・焼土まばら）
2．10YR2/1 黒色シルト（壁周溝？）
3．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 50%）〔貼床〕
A．10YR3/1 黒褐色シルト〔ピット〕

【SH69】
4．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 10%）
5．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
（黒褐色シルト 30%）〔貼床〕

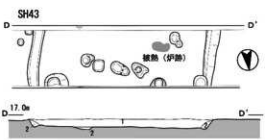
【SH63・SH64】
6．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
7．10YR2/1 黒色粘土質シルト〔貯蔵穴〕
8．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
9．10YR2/1 黒色粘土質シルト〔壁周溝〕



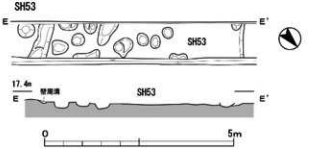
【SH58】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（焼土、黄褐色シルト 5%）
2．10YR5/2 灰黄褐色シルト（径 2～5 cm大礫混、硬化）〔貼床〕

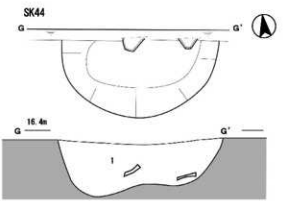


【SH49・SK46】
1．10YR2/1 黒色シルト
2．10YR2/1 黒色シルト（黄褐色シルト 30%）〔壁周溝 SD51〕
3．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）
4．10YR3/1 黒褐色シルト
5．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%） 6．10YR4/1 褐灰色シルト

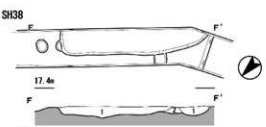


【SH43】
1．10YR3/1 黒褐色シルト（土器片・炭多含）
2．10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色シルト 30%）〔壁周溝 SD45〕





1．10YR3/1 黒褐色シルト（極細砂混）



【SH38】
1．10YR2/1 黒色シルト（径 2～5 cm大礫まばら）
2．10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色シルト 50%）

第15図　C・D・E区個別遺構図（1:100、SK44のみ1:20）

の溝状を呈する遺構であるが、複数の土坑やピットが重複しており、不定形な遺構である。

ＳＤ40（写真図版８）　Ｅ３・４グリッドで検出した幅約１ｍ、深さ35㎝の溝で、東西方向に走行する。黒褐色シルトで埋没する。

古代の須恵器摺鉢が出土した。

７．辻ノ内遺跡

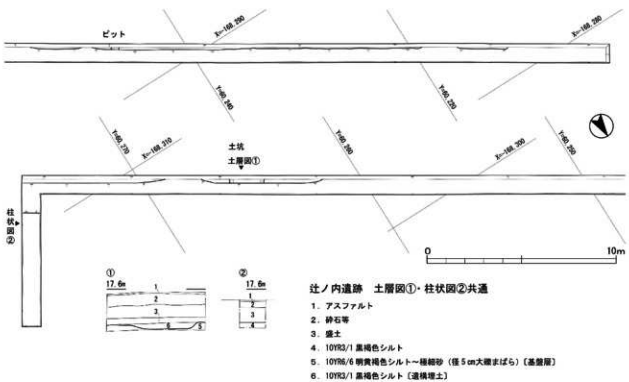
範囲確認調査で遺構が確認された範囲（延長約66m）の調査を行ったが、既存の用水管埋設により大半が攪乱されており、遺構面および遺構の残りは非常に悪かった（第16図）。

地表下約80cmで当地の基盤層（明黄褐色シルト）に達し、調査区南壁付近でピット・土坑の一部を確認したにとどまる。黒ボク土由来の黒褐色土層より古代（奈良時代か）の土師器片が出土しており、付近に古代の遺構が存在したとみられる。

註

（１）当該期の時代・時期区分に関しては、濃尾平野の廻間Ⅱ式後半の中で、奈良盆地東南部に大型前方後円墳（箸墓古墳）の成立をみたとする見方が有力である（早野浩二「土師器の編年④東海」『古墳時代の考古学１古墳時代史の枠組み』同成社、2011年）。

したがって、当該期は「弥生時代終末期～古墳時代初頭（早期）」などと呼ばれることがあるが、極めて煩雑となることや、本遺跡では廻間Ⅲ式以降の土器がそれ以前と比較的識別しやすいため、本報告では単純化して記述することとした。



第16図　辻ノ内遺跡調査区全体図（1:200）、土層図（1:100）

第２表　遺構一覧表

遺構番号	調査区	時期	規模（m）			出土遺物	備考（切り合いは古→新）
			長（径）	幅	深		
SH1	A-1, 2	弥生終末期	5.2	—	0.2	土師器	複数の竪穴住居の重複か
SZ2	A-3他	弥生終末期～古墳前期？	25以上	—	0.25	土師器	浅い落ち込み。数棟の建物含むか
SK3	A-1		—	—	—		掘乱、完掘せず
SD4	A-1		—	—	0.18	土師器	不定形な溝
SH5	A-1, 2	弥生終末期	4以上	—	0.2	土師器小片	SH1下層で確認。壁周溝あり
SH6	A-7, 8	弥生終末期～古墳前期	4～5	—	0.18		壁周溝、硬化面あり。SH36→SH6 遺物は表土掘削時に回収
SK7	A-6, 7	弥生終末期～古墳前期	1.5	—	0.4	土師器高杯	２基のピットないし土坑が重複か
SK8	A-7	古墳前期	1.2	—	0.4	S字甕	
SK9	A-6	弥生終末期～古墳前期	0.5	0.3	0.02	手焙形土器	周囲が被熱
SD10	A-12, 13	弥生終末期～古墳前期	—	0.8	0.1	土師器高杯	
SK11	A-19	奈良	1.5	—	0.3	土師器、須恵器	炭・焼土を多く含む SH13→SK11
SH12	A-19, 20	奈良	3.5	—	0.27	土師器、須恵器	
SH13	A-19	奈良	3.9	—	0.3		貼床、屋内土坑（SK15）あり SH13→SK11
SK14	A-20	弥生終末期～古墳前期	0.8	—	0.18		SK14→SH12
SK15	A-19	奈良	1.05	—	0.07	土師器	SH13屋内土坑
SZ16	B-6～9		18	—	0.2～0.3	土師器、須恵器	落ち込み状、耕作痕か
SZ17	B-10～13		10	—	0.2	土師器甕	落ち込み状、耕作痕か
SH18							欠番
SH19	B-10	奈良	2.3以上	—	0.13	土師器片 ミニチュア壺	貼床内でミニチュア壺 壁周溝あり、SH19→SH20
SH20	B-10	奈良	3.2	—	0.15	須恵器	SH19→SH20
SK21	B-9		1.3	—	0.05～0.2	土師器	SZ16下で検出、ピットの重複か
SH22	B-12, 13	弥生終末期	3.4	—	0.2	土師器	SH34→SH22
SD23	A-22		—	1.7	0.8	土師器	試掘坑No. 6内
SK24	B-14		1.2	—	0.35	土師器	風倒木か
SH25	B-19, 20	弥生終末期	4以上	—	0.25	土師器片	少なくとも３棟重複
SH26	B-23	弥生終末期	3.3	—	0.25	土師器有孔鉢 大型鉢	屋内土坑SK24あり、SH30→SH26 土器は床面から出土
SD27	B-15, 16		5.5	0.5	0.1		L字状
SH28	B-24, 25	弥生終末期	3.3以上	—	0.1	土師器	SH28→SH31 貼床あり
SD29	B-25		—	0.25	0.02		SH28内の浅い溝
SH30	B-23～24	弥生終末期	2.5以上	—	0.15	土師器	SH30→SH26 貼床より土器
SH31	B-24, 25	弥生終末期	2.5	—	0.1		SH28→SH31、貼床・壁周溝あり 遺物はSH28と一体で取り上げ
SH32	B-19	弥生終末期	1.5以上	—	0.3		SH32→SH33 断面で把握したもの
SH33	B-19, 20	弥生終末期	3.3	—	0.35		SH25・32→SH33 貼床あり
SH34	B-12	弥生終末期	3.4以上	—	0.1	土師器高杯	SH34→SH22
SH35	B-9	奈良？	2.5以上	—	0.1	なし	SH19, 20と似た形状、埋土よりSHと判断
SH36	A-8	弥生終末期～古墳前期	—	—	0.16	なし	SH36→SH6 壁周溝あり
SD37	E-9, 10		3以上	0.6	0.1	土師器片	
SH38	E-10	平安	4.0	—	0.2	土師器片	
SD39	E-4, 5	古代	—	1.5	0.3	土師器片	複数の遺構の重複か

遺構番号	調査区	時期	規模（m）			出土遺物	備考（切り合いは古→新）
			長（径）	幅	深		
SD40	E-3, 4	奈良	—	1.0	0.35	**瓦、須恵器揺鉢**	
SK41	D-13						欠番、D13-Pit1に変更
SD42	D-12		—	0.8	0.2	**土師器片**	
SH43	D-8, 9	古墳前期	4.3	—	0.25	**土師器**	壁周溝（SD45）、被熱面（5ヶ所）あり
SK44	D-11, 12	弥生終末期～古墳前期	0.8	—	0.3	**有段口縁鉢**	
SD45	D-8, 9	古墳前期	—	0.1	0.05	**土師器**	SH43壁周溝
SD46	D-5	平安～中世	—	0.6	0.2	**土師器**	遺物は混入
SD47	D-2		—	0.4	0.03	**土師器片**	
SK48	D-5	奈良？	2.0	—	0.4		SH49→SK48
SH49	D-5	弥生終末期～古墳前期	3.5以上	—	0.15	**土師器**	SH49→SK48 壁周溝（SD51）あり
SK50	D-1, 2		1.2以上	—	0.07	**土師器**	
SD51	D-5	弥生終末期～古墳前期	—	0.2	0.05	**土師器壺片**	SH49壁周溝
SK52	C-34, 35		1.0	—	0.15	**土師器片**	
SH53	C-32, 33	弥生終末期～古墳前期	5.5	—	0.05	**土師器**	壁周溝（SD56）あり
SZ54	C-31	弥生終末期～古墳前期	—	—	0.2	**土師器片**	SZ54→SD55
SD55	C-31	平安末～鎌倉	—	0.5	0.5	**土師器、山茶碗**	SZ54→SD55、クランクする溝
SD56	C-33	弥生終末期～古墳前期	—	0.5	0.07	**土師器小片**	SH53壁周溝
SD57	C-33	弥生終末期～古墳前期	—	**0.6**	0.15		不定形な溝
SH58	C-28, 29	奈良	3.8	—	0.3		遺物の大半は弥生終末期～古墳前期の土師器 貼床の遺物から奈良時代と判断
SH59	C-27	古墳前期	—	—	0.3	**土師器壺**	SH59→SZ62 屋内土坑SK60
SK60	C-27	古墳前期	0.7	—	0.15	**土師器**	SH59屋内土坑
SD61	C-29	奈良	—	—	-	**土師器**	SH58内の部分的な貼床
SZ62	C-23, 24		10.5	—	0.1	**土師器、須恵器 灰釉、緑釉陶**	3棟以上の竪穴住居が重複か SH59・70を識別
SH63	C-22, 23	弥生終末期～古墳前期	3.2	—	0.15	**土師器高杯**	壁周溝（SD68）あり SH64→SH63
SH64	C-21, 22	弥生終末期～古墳前期	約4.0	—	0.1	**土師器**	貼床有り
SK65	C-19	平安後～末	2.5	—	0.05	**灰釉陶器 山茶碗**	浅い落ち込み状
SD66	C-21	弥生終末期～古墳前期	—	0.2	0.05	**土師器片**	SH64壁周溝
SK67	C-20	弥生終末期～古墳前期	2.6		0.1～0.2	**土師器壺片**	大半が撹乱を受ける
SD68	C-23	弥生終末期～古墳前期	—	0.3	0.15	**土師器片**	SH63壁周溝
SH69	C-23	古墳前期	約6.0	—	0.2		SZ62より分離、2棟以上の建物が重複か 遺物はSZ62として取り上げ
SH70	C-24	古墳前期	3.7	—	0.2		SZ62より分離、壁周溝、屋内土坑あり 遺物はSZ62として取り上げ
SK71	C-16	平安末	1.1	—	0.4	**山茶碗**	
SH72	C-11, 12	弥生終末期	約4.0	—	0.5	**土師器高杯**	貼床は局所的な溝状、前身建物あり 奈良時代の建物の可能性もあり
SH73	C-3, 4	弥生終末期	約4.0	—	0.15～0.2	**土師器**	
SK74	B-23	弥生終末期	1.0	—	0.3		SH26屋内土坑

Ⅳ 遺 物

出土遺物の主体は弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器、奈良時代の土師器・須恵器である。平安時代以降の遺物は少ないが、緑釉陶器などの重要遺物も散見される。総量はコンテナ換算で38箱(61.3kg)（整理前）である。

以下、遺構番号順に記述するが、依拠した土器編年や器種分類等は註1に記した[1]。各遺物の詳細は遺物観察表（第3表）も参照されたい。

ＳＨ１（第17図） 弥生時代終末期の土師器がみられる。1～3は高杯または小型器台で、1は脚部内に棒状具の刺突痕がみられる。石黒立人氏が「脚天井部刺突」と呼ぶものである[2]。5・6はく字状口縁の甕である。7は砂岩製の砥石で、表裏両面が摩耗するが、石鏃形の形状からみて、磨石・石杵のような使用法かもしれない。

ＳＫ７（第17図） 椀形高杯の杯部（8）がみられる。内外面とも丁寧なミガキで仕上げる。

ＳＫ８（第17図） 9は土師器甕の口縁。10はＳ字甕Ｃ類であるが、肩部外面のヨコハケはみられず、在地色が強い。

ＳＫ９（第17図） 11は手焙形土器で、受口状の鉢部端部に刺突（刻み）がみられる。

ＳＤ10（第17図） 土師器高杯の脚部（12）は、杯部中央に粘土を充填して仕上げる。

ＳＫ11（第17図） 22～37は奈良時代後半の土師器・須恵器である。22は土師器皿、23～26は杯で、斎宮編年のⅠ－3段階に位置づけられよう。25は放射状暗文がみられるが、他はナデで仕上げる。29～37は甕で、口径30cmを超えるものが多い。35は長胴甕か。38は甑の底部である。27・28は須恵器で、杯27は見込みにヘラ記号がみられる。

ＳＨ12（第17図） いずれも奈良時代後半の遺物である。甕は16・17など小型のもので、口縁部が反り返る。19～21は杯・皿で、斎宮編年のⅠ－3段階。20・21は底部外面をケズリとする。18は須恵器杯である。

ＳＫ14（第17図） 土師器高杯の脚部（13）が出土している。

ＳＺ16（第17図） 14は台付甕で、ごく短い台部をもつ在地的なもの。

ＳＨ19（第18図） 41は貼床から出土したミニチュアの壺ないし甕である。底部は平底で、口縁端部をわずかに摘み上げることから、奈良時代のものか。

ＳＨ20（第18図） 須恵器甕の口縁部（42）が出土している。

ＳＨ22（第18図） 39は高杯で、脚部裾が内湾傾向を示す。40は口縁部端が強く外反する甕である。ともに弥生時代終末期のもの。

ＳＨ25（第18図） 43は土師器の小型丸底壺ないし鉢である。44は裾が大きく開く器台。

ＳＨ26（第18図） 45～47は弥生時代終末期の土師器である。45は小型・平底の鉢で、底部はやや上げ底となる。46は杯部の深い高杯で、廻間Ⅱ式併行のものであろう。47は大型の鉢で、あまり類例を見ないもの。外面と口縁部内面に粗いハケがみられる。

ＳＨ28（第18図） 48は弥生時代終末期頃の高杯脚部。

ＳＨ30（第18図） 50はく字状口縁の土師器甕。

ＳＨ34（第18図） 51は弥生時代後期～終末期の高杯脚部で、胎土は白色精良である。全体的に薄手で、透孔は小さいものである。

ＳＨ38（第18図） 49は平安時代の土師器杯で、ナデ調整で仕上げる。

ＳＤ40（第18図） 52は須恵器摺鉢で、底部外面に刺突がある。

ＳＫ48（第18図） 53は弥生時代終末期前後の小型鉢であろう。底部は平底である。

ＳＨ43（第18図） 古墳時代前期の土師器が主体である。54～58はＳ字甕で、Ｃ類が主体とみられるが、58以外はやや作りが粗雑である。59～69は台付甕の台部で、やや内湾し端部を折り返さないものが目立つ。64はごく短い台部を粗いナデで作りだす。67～69はＳ字甕の台部である。70はハケ仕上げの鉢、71は小型丸底壺でミガキ仕上げ。

72～79は平底の小型鉢で、72・73・76は外面をケズリとする。81は底部の分厚い有孔鉢である。

82～89は高杯で、82・84は杯部が深いが、83は浅く直線的に伸びあがる。85～89は脚部で、櫛描直線文が消失ないし退化したものが多い。

90～100は広口壺で、無文・外面ハケ仕上げのものが主体である。90・91は口縁部外面に縦方向のケズリがみられる。93・94は甕かもしれない。

ＳＫ44（第19図）　101は弥生時代後期の壺体部で、櫛描文と縦方向の直線文がみられる。102は弥生時代終末期～古墳時代前期の高杯である。

103は有段口縁の鉢で、南勢地域で類例を見ないものである。胎土は精良で、外面下半はケズリ、内外面ともミガキ仕上げの丁寧なつくりである。弥生時代終末期～古墳時代前期のものか。欠損により判断が難しいが、口縁部が片口となる可能性がある。内面全体にベンガラが付着し、外面は弱いながらも煤が付着する（写真図版10）。

赤色顔料の保管容器やパレット、徳島県矢野遺跡にみられる、赤色顔料の使用に関連した加熱調整用具[3]の可能性などがあろう。県内でも内面に水銀朱が付着する鉢の事例がある。

ＳＨ53（第19図）　121は粗いハケの壺で、底部は輪高台状の上げ底である。

ＳＤ55（第19図）　104～112は中世前期の遺物で、小皿、鍋は中世Ⅰ～Ⅱ期のものである。109・110は第４・５型式の山茶碗である。111・112は土錘で、奈良時代以前の遺構には土錘が含まれず、対照的である。113～119は奈良時代以前の混入遺物。

ＳＨ58（第19図）　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物が主体である。124～126は台付甕で、受口状口縁の124、やや内湾する125、Ｓ字状126がある。134～138は壺で、138は赤彩がある。132・133は大型の鉢である。奈良時代の土師器甕139もあるが、どちらが混入遺物かは明確にしがたい。

ＳＨ59（第19図）　122は古墳時代前期のいわゆる柳ヶ坪型壺である。123も広口壺で、外面ハケ仕上げ、口縁端部に刺突がある。

ＳＨ63（第19図）　弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器である。145～147は台付甕で、145は外面工具ナデのもの。146は小ぶりの台部で端部を短く折り返す。148・149は壺底部で、いずれもハケ仕上げのもの。150は小型器台である。

ＳＺ62（第20図）　古墳時代前期を中心に、混入遺物もみられる。

161は弥生時代後期前半の受口状口縁甕で、器壁は厚く、胎土は白色である。集落外からの搬入品か。162～180は弥生時代終末期～古墳時代前期の甕で、台付甕はＳ字甕Ｃ類が多い。171・172は布留系の甕口縁であるが、分厚く在地色が強い。173～180は台部で、典型的なＳ字甕のものは少ない。181～201は高杯・器台で、廻間Ⅲ式併行のものが主体である。202・203は内湾口縁壺で、203はハケ仕上げ。204は小型丸底壺である。205～207は小型鉢で、いずれも外面ケズリとする。208～213は壺で、ハケ仕上げのものが大半である。

灰釉陶器深椀（214）、緑釉陶器瓶（215）は混入であるが、215は優品であり注目される。

ＳＨ64（第19図）　140～142は弥生時代終末期のく字状口縁甕であるが、142の口縁はやや内湾しており、布留系かもしれない。

ＳＫ65（第19図）　143は灰釉陶器椀である。

ＳＨ70（第19図）　151はＳ字甕であるが、口縁部の拡張が不十分な粗いつくりである。

ＳＫ71（第19図）　144は輪花のある第４型式の山茶碗である。

ＳＨ72（第19図）　弥生時代終末期頃の土師器がみられる。152・153・155は高杯、154・156は広口壺である。157は平底の小型鉢で、内外面とも細かいハケで仕上げる。

ＳＨ73（第19図）　158～160はいずれも弥生時代終末期の有稜高杯である。

その他ピット・範囲確認調査（第21図）　弥生時代終末期～古墳時代、奈良時代、平安～鎌倉時代の遺物があり、竪穴住居など遺構の検出状況に準じたものがみられるが、特にＣ区や範囲確認調査坑No16～20で平安～中世前期の遺物が目立つ。241は加工円板。251は貝殻腹縁の連弧文のある内湾口縁壺である。

表土・包含層等（第22・23図）　主に重機掘削中に出土したものである。

262～291はＡ区出土で、小型器台275など、残りの良い土器が含まれる。290は奈良時代の移動式カマドの一部か。291は用途不明の土製品で、粘土塊

を粗く成形し、草本の圧痕がある。スサは含まない。292～309はB区出土で、奈良時代の甕が多い。303は底部にヘラ描きがある。308は側面を研磨する石製の円板である。

310～340はC区出土で、弥生時代終末期～古墳時代の土器では、有孔鉢321、内湾口縁壺326、いわゆるヒサゴ壺323などが特筆される。他に古代の須恵器336～338、中世の遺物339～346がある。

347～351はD区、352はE区の遺物である。中世の山茶碗などがみられる。調査区全体を通じて、中世の遺物は中世Ⅰ期（平安時代末）に収まるものが多い。

註

（1）土器等の分類・編年については以下の文献による。

弥生土器・古墳時代の土師器：三重県埋蔵文化財センター『村竹ニノ遺跡』2000年/愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990年。

古代の土師器：斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』2001年。

須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年/東海土器研究会『須恵器生産の出現から消滅』（第1回東海土器研究会資料）2000年/愛知県『愛知県史』別編窯業1（古代猿投系）、2015年。

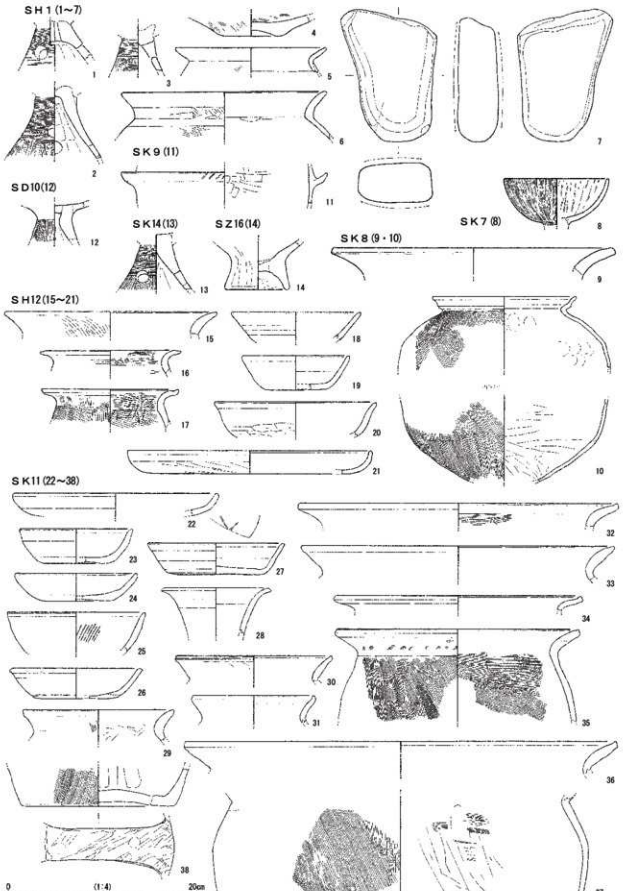
灰釉陶器：楢崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ、愛知県教育委員会、1983年/愛知県『愛知県史』別編窯業1（古代猿投系）、2015年。

中世土器：伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2、三重県、2008年

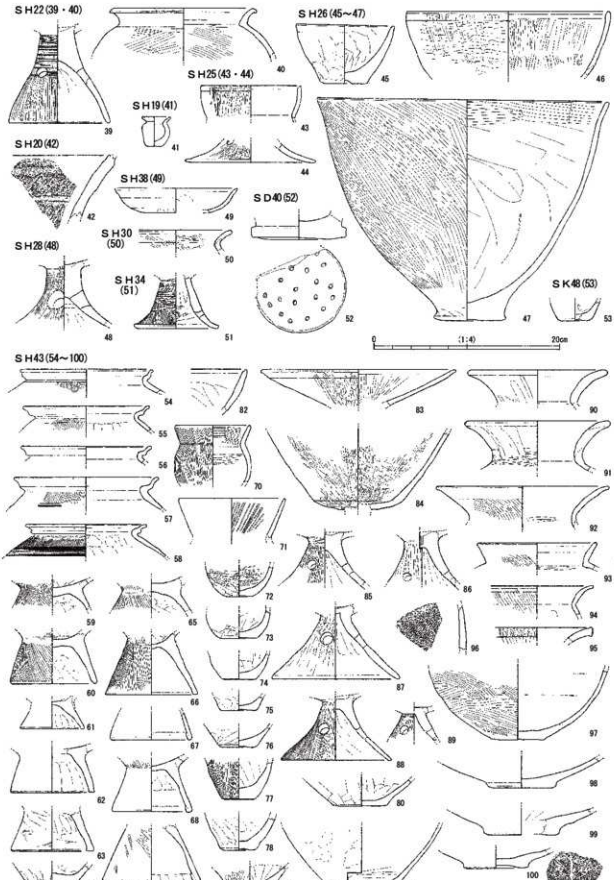
山茶碗：藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター、1994年。

（2）石黒立人「荒尾南遺跡出土土器と地域関係」『荒尾南遺跡を読み解く』（第34回考古学研究会東海例会資料）、考古学研究会東海例会、2020年。

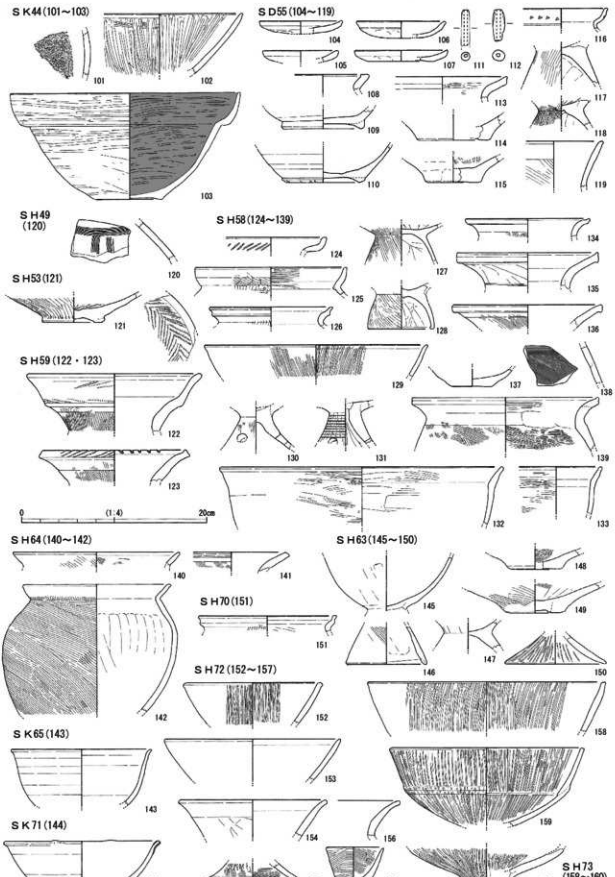
（3）徳島県『赤色顔料生産遺跡及び関連遺跡の調査若杉山辰砂採掘遺跡出土品編』2021年。本書中では、被熱痕のある内面朱付着土器について、胎土中の残存脂質分析から、顔料と動植物由来の液体（膠など）を熱した容器の可能性を指摘している。



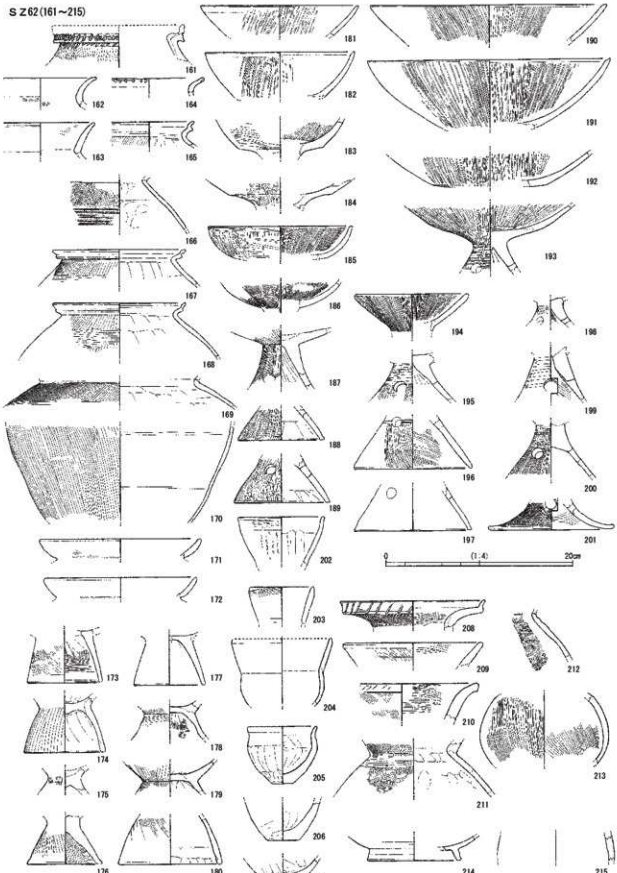
第17図　出土遺物① (1:4)



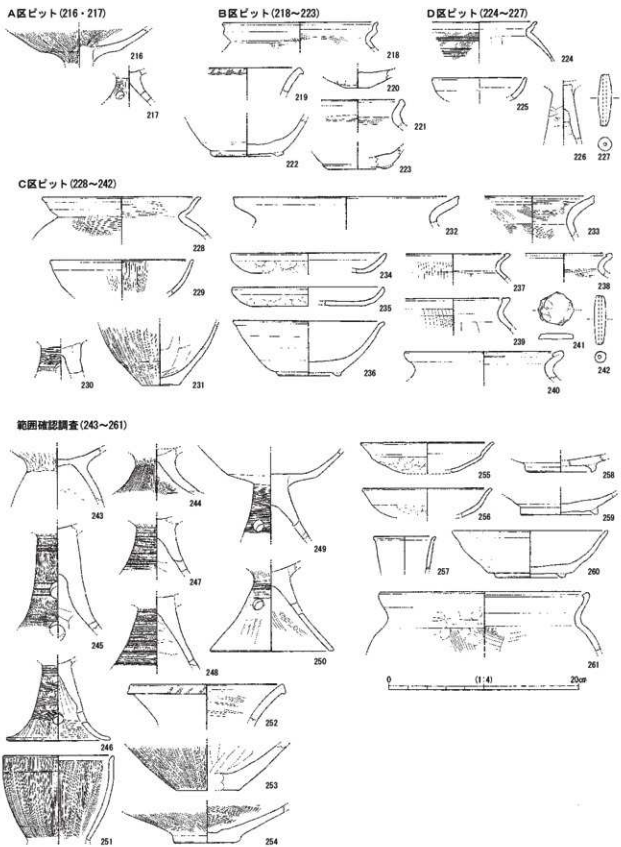
第18図　出土遺物②（1:4）



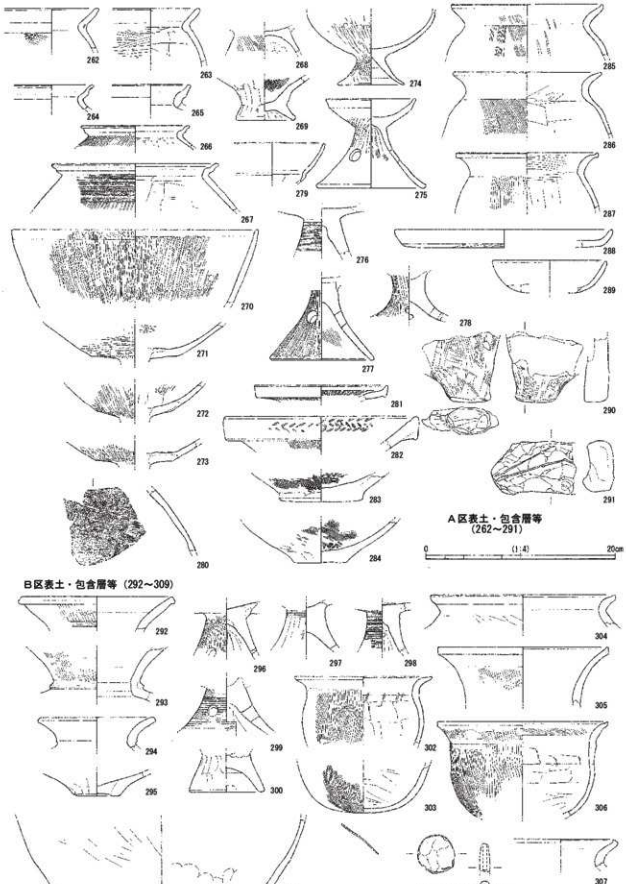
第19図　出土遺物③（1:4）網掛けは赤彩・赤色顔料付着



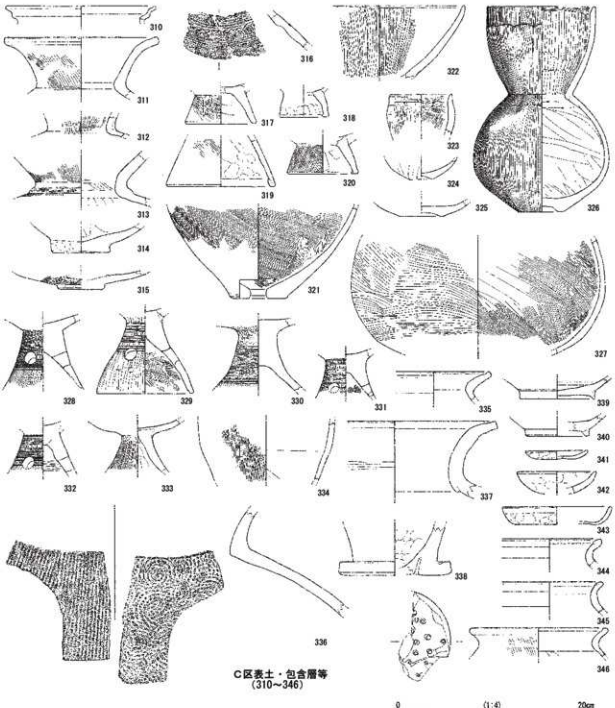
第20図　出土遺物④（1:4）



第21図　出土遺物⑤（1:4）



第22図　出土遺物⑥（1:4）



第23図　出土遺物⑦（1:4）

第３表　遺物観察表

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量（cm）口径	法量（cm）底径	法量（cm）器高	技法・文様の特徴 施釉	色調（外面）	特記事項
1	005-03	土師器	高杯	A-2	SH1上層	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描直線文	橙	透孔３方向
2	005-01	土師器	高杯	A-2	SH1上層	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描直線文	橙	脚欠片に棒状具刺突
3	005-02	土師器	高杯	A-2	SH1上層	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描直線文	橙	
4	006-03	土師器	壺	A-2	SH1上層	底部12/12	—	5.5	2.2	内：ﾊｹﾒ 外：ﾊｹ	浅黄橙	
5	006-02	土師器	甕	A-2	SH1上層	口縁部2/12	16.0	—	2.5	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
6	006-01	土師器	甕	A-2	SH1上層	口縁部1/12	21.4	—	5.1	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
7	005-01	石製品	砥石	A-1	SH1上層	完形	長 14.0	幅 10.2	厚 4.3		—	重さ850g、砂岩、磨石の可能性もあり
8	006-04	土師器	高杯	A-6 A-7	SK7	杯部9/12	10.9	—	4.8	内：ﾐｶｷ 外：ﾐｶｷ	浅黄橙	
9	007-06	土師器	甕	A-7	SK8	鉢部1/12	29.4	—	2.9	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
10	010-01	土師器	台付甕	A-7	SK8	口縁～底部 6/12	15.0	—	19.6	内：ﾊｹﾒ、ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
11	008-01	土師器	手焙形土器	A-6	SK9	胴部1/12	鉢部 21.8	—	3.8	内：工具ﾅﾃﾞ 外：鉢部口縁に刺突	明赤褐	
12	009-05	土師器	高杯	A-12 A-13	SD10	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ	にぶい橙	
13	011-03	土師器	高杯	A-20	SK14	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描直線文	橙	透孔３方向
14	011-04	土師器	台付甕	B-8	SZ16	台部7/12	—	6.6	5.0	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：工具ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
15	007-04	土師器	甕	A-19 A-20	SH12	口縁部1/12	22.4	—	2.3	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
16	007-05	土師器	甕	A-19 A-20	SH12	口縁部1/12	15.0	—	2.4	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
17	007-03	土師器	甕	A-19 A-20	SH12	口縁～胴部 6/12	14.4	—	4.0	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
18	011-02	須恵器	杯	A-19 A-20	SH12	1/12	13.5	—	3.0	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰	
19	007-02	土師器	杯	A-19 A-20	SH12	3/12	11.2	—	3.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
20	011-01	土師器	杯	A-19 A-20	SH12	1/12	16.1	—	3.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
21	007-01	土師器	皿	A-19 A-20	SH12	2/12	25.8	19.4	2.5	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
22	055-05	土師器	皿	AfK	表土（SK11上面）	1/12	21.6	—	2.4	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
23	009-02	土師器	杯	A-19	SK11	2/12	11.8	6.0	3.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
24	009-03	土師器	杯	A-19	SK11	2/12	12.8	5.6	2.9	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
25	053-05	土師器	杯	AfK	表土（SK11上）	1/12	14.5	—	4.2	内：ﾖｺﾅﾃﾞ、放射状暗文 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
26	053-04	土師器	杯	AfK	表土（SK11上）	1/12	13.4	—	3.2	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
27	054-01	須恵器	杯	AfK	表土（SK11上）	4/12	14.2	8.2	3.3	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ヘラ切り	暗灰黄	見込みに×描き
28	055-02	須恵器	壺	A-19	包含層（SK11上）	口縁部2/12	10.8	—	5.0	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	褐灰	
29	055-01	土師器	甕	AfK	表土（SK11上）	口縁部2/12	15.8	—	3.3	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
30	053-01	土師器	甕	AfK	表土（SK11上）	口縁部1/12	16.4	—	2.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
31	009-01	土師器	甕	A-19	SK11	口縁部2/12	12.8	—	3.0	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
32	008-03	土師器	甕	A-19	SK11	口縁部1/12	33.7	—	2.4	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
33	008-04	土師器	甕	A-19	SK11	口縁部1/12	33.0	—	3.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
34	008-02	土師器	甕	A-19	SK11	口縁部1/12	25.9	—	1.6	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
35	054-02	土師器	甕	AfK	表土	口縁～胴部 3/12	25.6	—	9.7	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
36	008-05	土師器	甕	A-19	SK11	口縁部1/12	45.7	—	3.4	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
37	056-01	土師器	甕	A-19	包含層	胴部片	頸部 35.8	—	—	内：ﾊｹﾒ、ｸｽﾞﾙ 外：ﾊｹﾒ	浅黄橙	
38	009-04	土師器	甑	A-19	SK11	底部1/12	—	16.0	4.2	内：ﾊｹﾒ、底部ﾌﾞﾙ 外：ﾊｹﾒ、工具ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
39	012-02	土師器	高杯	B-12 B-13	SH22	脚部12/12	—	10.6	10.4	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、櫛描直線文	橙	透孔３方向
40	011-06	土師器	甕	B-12 B-13	SH22	口縁～胴部 1/12	14.9	—	5.3	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、刺突	浅黄橙	
41	011-05	ミニチュア土器	壺	B-11	SH19	12/12	3.0	3.0	3.2	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ	明黄褐	貼床内出土
42	013-01	須恵器	甕	B-8	SH20	口縁部片	—	—	—	外：沈線、刺突	灰	
43	013-03	土師器	壺	B-20 B-21	SH25	口縁部2/12	10.7	—	3.4	内： 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	明赤褐	または鉢
44	013-04	土師器	甕	B-20 B-21	SH25	底部1/12	—	13.7	2.2	内： 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	または小型器台
45	012-03	土師器	鉢	B-23	SH26	10/12	10.4	4.3	6.4	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：工具ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
46	013-05	土師器	高杯	B-23	SH26	2/12	21.5	—	6.8	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
47	012-01	土師器	鉢	B-23	SH26	口縁部5/12 底部12/12	31.2	7.6	24.0	内：工具ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ 外：ﾊｹﾒ	灰黄	
48	013-06	土師器	高杯	B-24 B-25	SH28	脚部片	—	—	—	内：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	透孔３方向
49	014-02	土師器	甕	E-10 E-11	SH38	1/12	13.0	7.0	2.6	内：ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾐｶｷ、ﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	橙	
50	014-01	土師器	甕	B-23	SH30	口縁部片	—	—	—	内：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴 施釉	色調（外面）	特記事項
51	043-01	土師器	高杯	B-12	Pit1 (SH34内)	脚部12/12	—	8.7	5.6	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾐｶﾞｷ､櫛描直線文	浅黄橙	透孔4方向
52	013-02	須恵器	擂鉢	E-3 E-4	SD40	底部5/12	—	10.0	2.6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	灰	底部外面に刺突
53	023-02	土師器	鉢	D-5	SK48	底部4/12	—	2.8	2.0	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
54	022-01	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部1/12	14.0	—	2.5	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
55	016-03	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部1/12	13.2	—	2.8	内:ｵｻｴ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
56	022-04	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部1/12	13.8	—	1.9	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	口縁部外面に煤付着
57	016-02	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部2/12	15.2	—	3.5	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	口縁部外面に煤付着
58	014-05	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部7/12	12.7	—	3.6	内:ｵｻｴ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
59	022-07	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部片	—	—	—	内:ｵｻｴ 外:ﾊｹ	にぶい橙	
60	019-01	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部12/12	—	9.0	5.9	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい黄橙	
61	017-07	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部9/12	—	6.8	3.0	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	浅黄橙	
62	017-05	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部片	—	8.4	5.1	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
63	019-03	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部6/12	—	8.7	4.3	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい橙	
64	021-07	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部9/12	—	5.6	2.6	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
65	022-06	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部片	—	—	—	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい黄橙	
66	014-03	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部3/12	—	9.7	6.6	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	浅黄橙	
67	047-03	土師器	台付甕	D-8	Pit2 (SH43内)	台部1/12	—	9.0	2.7	内:ｵｻｴ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:摩滅	橙	
68	019-02	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部12/12	—	8.2	5.9	内:ｵｻｴ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい橙	
69	017-08	土師器	台付甕	D-8 D-9	SH43	台部3/12	—	10.0	5.8	内:ｵｻｴ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
70	047-02	土師器	鉢	D-8	Pit2 (SH43内)	頸部3/12	8.0	—	6.1	内:ﾊｹ 外:ﾊｹ	橙	
71	022-03	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁部1/12	11.4	—	4.2	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
72	021-03	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部4/12	—	2.8	3.3	内:ﾐｶﾞｷ 外:ｹｽﾞﾘ､ﾐｶﾞｷ	橙	
73	021-02	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部7/12	—	3.8	3.1	内:工具ﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ	にぶい橙	
74	017-03	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部11/12	—	3.0	2.8	内:工具ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
75	021-05	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部6/12	—	3.8	1.4	内:ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ	橙	
76	021-06	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部10/12	—	3.6	2.2	内:ﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	
77	017-02	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部12/12	—	3.1	4.0	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	橙	
78	021-04	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部11/12	—	3.4	3.6	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ	橙	
79	017-04	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部6/12	—	4.4	2.8	内:ﾊｹ 外:ﾊｹ	橙	
80	021-09	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	底部12/12	—	5.8	2.9	内:工具ﾅﾃﾞ 外:工具ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
81	020-04	土師器	鉢	D-8 D-9	SH43	底部6/12	—	5.8	6.9	内:ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ	にぶい橙	有孔鉢
82	022-05	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	口縁部片	—	—	—	内:工具ﾅﾃﾞ 外:	橙	
83	021-10	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	杯部1/12	20.6	—	3.9	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	
84	014-04	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	杯部5/12	—	—	—	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	褐灰	
85	018-06	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ､櫛描直線文	橙	透孔3方向
86	018-07	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ	浅黄橙	
87	015-01	土師器	高杯	D-9	SH43	脚部12/12	—	13.4	7.8	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	透孔3方向
88	018-05	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	底部1/12	—	11.7	6.8	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	透孔3方向
89	018-04	土師器	高杯	D-8 D-9	SH43	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ､ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ､櫛描直線文	浅黄橙	透孔3方向
90	016-04	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁部1/12	14.2	—	3.8	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ､ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
91	019-06	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部5/12	15.0	—	5.3	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ､ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
92	016-01	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁部1/12	18.4	—	4.4	内:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
93	022-02	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁～頸部1/12	12.8	—	2.9	内:工具ﾅﾃﾞ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
94	016-06	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁部片	—	—	—	内:ﾅﾃﾞ､ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ､ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	煤付着、甕か？
95	016-07	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	口縁部片	—	—	—	内: 外:刺突	橙	
96	022-08	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	胴部片	—	—	—	内: 外:沈線間に刺突	にぶい橙	
97	020-03	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	底部8/12	—	5.6	8.2	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	浅黄橙	
98	020-02	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	底部11/12	—	7.0	3.3	内: 外:ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
99	020-01	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	底部4/12	—	7.2	2.8	内:ﾊｹ 外:ﾅﾃﾞ	にぶい橙	底部に木葉痕
100	017-01	土師器	壺	D-8 D-9	SH43	底部5/12	—	6.2	2.0	内:ﾅﾃﾞ 外:	浅黄橙	底部に木葉痕
101	022-09	弥生土器	壺	D-11	SK44	胴部片	—	—	—	内: 外:櫛描文	浅黄橙	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構	部位	法量（cm）			技法・文様の特徴	色調（外面）	特記事項
						残存度	口径	底径	器高	施釉		
102	023-01	上師器	高杯	D-11 D-12	SK44	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	橙	
103	026-01	上師器	鉢	D-11 D-12	SK44	口縁部3/12 底部12/12	24.6	7.0	11.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	浅黄橙	外面に煤付着、片口？ 内面にヘラナデ付着
104	024-05	上師器	小皿	C-30 C-31	SD55	2/12	8.8	—	1.4	内：ナデ 外：ナデ→ミガキ、ナデ	橙	
105	024-06	上師器	小皿	C-30 C-31	SD55	2/12	8.0	—	1.2	内：ナデ 外：ナデ→ミガキ、ナデ	灰白	
106	025-02	上師器	小皿	C-30 C-31	SD55	2/12	9.2	—	1.8	内：ナデ 外：ナデ→ミガキ、ナデ	灰白	
107	025-01	上師器	小皿	C-30 C-31	SD55	1/12	9.8	—	1.2	内：ナデ 外：ナデ→ミガキ、ナデ	灰白	
108	025-04	上師器	鍋	C-30 C-31	SD55	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	浅黄橙	
109	024-02	山茶椀	椀	C-30 C-31	SD55	底部7/12	—	8.5	2.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	灰白	
110	024-01	山茶椀	椀	C-30 C-31	SD55	底部12/12	—	8.0	3.9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ミガキ？痕	灰白	
111	026-02	上製品	土錘	C-30 C-31	SD55	完形	長3.9	幅0.9	—	ナデ→ミガキ、ナデ	灰白	重さ3.0g
112	026-01	上製品	土錘	C-30 C-31	SD55	完形	長3.4	幅1.4	—	ナデ→ミガキ、ナデ	灰	重さ4.0g
113	025-05	上師器	甕	C-30 C-31	SD55	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	浅黄橙	
114	025-07	上師器	壺	C-30 C-31	SD55	底部2/12	—	7.4	2.6	内： 外：ナデ	褐灰	
115	024-03	上師器	壺	C-30 C-31	SD55	底部5/12	—	5.4	2.8	内：ハケ 外：ナデ	にぶい橙	
116	025-03	上師器	甕	C-30 C-31	SD55	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ、刺突 外：ヨコナデ、刺突	灰白	
117	024-04	上師器	台付甕	C-30 C-31	SD55	台部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	褐灰	
118	027-01	上師器	台付甕	C-30 C-31	SD55	台部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	にぶい黄橙	
119	025-06	上師器	鉢	C-30 C-31	SD55	口縁部片	—	—	—	内：ナデ 外：ハケ	褐灰	
120	026-03	上師器	壺	D-5	SD51	肩部片	—	—	—	内：ハケ 外：ハケ→櫛描文	淡赤橙	
121	044-01	上師器	壺	C-32	Pit2 (SH53Pit)	底部12/12	—	6.0	3.1	内：ハケ 外：ハケ	にぶい黄橙	
122	027-03	上師器	壺	C-27	SH59	口縁部3/12	18.2	—	6.0	内：ヨコナデ、刺突 外：ハケ→ヨコナデ、刺突	橙	
123	027-04	上師器	壺	C-27	SH59	口縁部1/12	15.4	—	3.5	内：ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ、刺突	にぶい橙	
124	039-03	上師器	台付甕	C-28 C-29	SH58	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、刺突	浅黄橙	
125	027-05	上師器	甕	C-28	SD61 (SH58Pit)	口縁部1/12	16.3	—	3.0	内：ハケ 外：ハケ	灰白	
126	036-06	上師器	台付甕	C-28 C-29	SH58	口縁部1/12	13.2	11.2	2.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい橙	
127	037-03	上師器	台付甕	C-28 C-29	SH58	台部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	にぶい橙	
128	037-02	上師器	台付甕	C-28 C-29	SH58	台部3/12	—	7.0	4.7	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	にぶい橙	
129	036-02	上師器	高杯	C-28 C-29	SH58	口縁部1/12	24.0	—	3.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい橙	
130	037-01	上師器	高杯	C-28 C-29	SH58	脚部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ヨコナデ	橙	透孔3方向
131	037-05	上師器	高杯	C-28 C-29	SH58	脚部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ヨコナデ→櫛描直線文	にぶい橙	
132	036-01	上師器	鉢	C-28 C-29	SH58	口縁部1/12	30.2	—	6.3	内：ハケ 外：ハケ	橙	
133	036-05	上師器	鉢	C-28 C-29	SH58	口縁部片	—	—	—	内：ハケ 外：ハケ	橙	
134	036-04	上師器	壺	C-28 C-29	SH58	口縁部1/12	13.3	—	2.0	内：ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	橙	
135	036-03	上師器	壺	C-28 C-29	SH58	口縁部4/12	15.0	—	3.8	内：ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	にぶい黄橙	
136	037-01	上師器	壺	C-28 C-29	SH58	口縁部1/12	15.8	—	2.5	内：ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	橙	
137	037-06	上師器	壺	C-28 C-29	SH58	底部6/12	—	4.0	1.9	内：ナデ 外：ナデ	橙	
138	039-01	上師器	壺	C-28 C-29	SH58	胴部片	—	—	—	内： 外：ハケ→櫛描直線文	浅黄橙	外面に赤彩（ベンガラ）
139	027-06	上師器	甕	C-28	SD61 (SH58Pit)	口縁部2/12	20.0	—	5.9	内：ハケ→ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	にぶい黄橙	
140	037-08	上師器	甕	C-21 C-22	SH64	口縁部1/12	17.8	—	1.7	内：ハケ→ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	にぶい黄橙	外面に煤付着
141	037-07	上師器	甕	C-21 C-22	SH64	口縁部小片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	橙	
142	046-01	上師器	甕	C-22	Pit1	5/12	15.4	—	14.0	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ→ヨコナデ	にぶい黄橙	外面に煤付着
143	027-07	灰釉陶器	椀	C-19	SH65	口縁部1/12	15.0	—	6.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	オリーブ黄	
144	041-06	山茶椀	椀	C-16	SH71	口縁部1/12	16.4	—	4.8	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	灰白	輪花
145	042-02	上師器	台付甕	C-22	SH63	底部5/12	—	—	—	内：ナデ 外：工具ナデ	浅黄橙	
146	042-04	上師器	台付甕	C-22	SH63	台部1/12	—	8.4	4.1	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	橙	
147	042-06	上師器	台付甕	C-22	SH63	台部片	—	—	—	内：ナデ→ミガキ、ナデ 外：ハケ	浅黄橙	
148	042-03	上師器	壺	C-22	SH63	底部2/12	—	5.0	2.0	内：ハケ 外：ハケ	褐灰	
149	042-01	上師器	壺	C-22	SH63	底部10/12	—	5.4	3.1	内：ハケ 外：ハケ	浅黄橙	
150	042-05	上師器	小型器台	C-22	SH63	底部1/12	—	10.6	3.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	橙	
151	043-01	上師器	台付甕	C-24	Pit1 (SH70Pit)	口縁部1/12	14.7	—	1.6	内：ハケ→ヨコナデ 外：ハケ→ヨコナデ	にぶい褐	外面に煤付着
152	040-04	上師器	高杯	C-11 C-12	SH72	口縁部片	—	—	4.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	橙	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構	部位	法量（cm）			技法・文様の特徴	色調（外面）	特記事項
						残存度	口径	底径	器高	施釉		
153	041-01	上師器	高杯	C-11 C-12	SH72	口縁部1/12	18.8	—	4.4	摩滅	橙	
154	041-03	上師器	壺	C-11 C-12	SH72	口縁部1/12	15.6	—	4.0	内：ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	浅黄橙	
155	041-05	上師器	高杯	C-11 C-12	SH72	底部2/12	—	9.4	2.0	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	にぶい橙	
156	041-04	上師器	壺	C-11 C-12	SH72	口縁部片	—	—	—	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
157	041-02	上師器	鉢	C-11 C-12	SH72	口縁部4/12 底部12/12	6.1	3.4	3.8	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	橙	
158	040-02	上師器	高杯	C-3 C-4	SH73	杯部1/12	25.6	—	5.2	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
159	040-03	上師器	高杯	C-3 C-4	SH73	杯部3/12	20.4	—	8.4	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
160	040-01	上師器	高杯	C-3 C-4	SH73	杯部3/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
161	028-09	弥生土器	甕	C-23	SZ62	口縁部3/12	14.0	—	—	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ，刺突	灰白	
162	035-04	上師器	甕	C-23	SZ62	口縁部片	—	—	—	内：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	外面に煤付着
163	038-01	上師器	甕	C-23	SZ62	口縁部片	—	—	—	内：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	灰黄褐	
164	029-01	弥生土器	甕	C-23	SZ62	口縁部片	—	—	—	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ，刺突	にぶい黄橙	
165	038-03	上師器	台付甕	C-23	SZ62	口縁部片	—	—	—	内：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ	灰黄褐	
166	028-02	上師器	台付甕	C-23	SZ62	肩部片	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
167	031-04	上師器	台付甕	C-23	SZ62	口縁部1/12	14.0	—	3.8	内：ﾅﾃﾞｴ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
168	031-03	上師器	台付甕	C-24	SZ62	口縁部2/12	14.0	—	5.7	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
169	031-02	上師器	台付甕	C-23	SZ62	頸部3/12	16.0	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
170	033-01	上師器	台付甕	C-23	SZ62	胴部片	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
171	030-02	上師器	甕	C-23	SZ62	口縁部2/12	17.0	—	2.0	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ	暗灰黄	
172	029-05	上師器	甕	C-23	SZ62	口縁部2/12	16.0	—	2.1	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ，ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
173	033-03	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部1/12	—	7.8	5.5	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	にぶい橙	
174	033-02	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部3/12	—	8.6	6.0	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	にぶい橙	
175	034-05	上師器	高杯	C-23	SZ62	台部片	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	橙	
176	029-04	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部3/12	—	7.6	5.2	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
177	031-05	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部4/12	—	7.6	5.5	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：摩滅	にぶい黄橙	
178	030-01	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部片	—	—	—	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	灰黄	
179	030-06	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部片	—	—	—	内：ﾊｹ 外：ﾊｹ	にぶい黄橙	
180	035-05	上師器	台付甕	C-23	SZ62	台部10/12	—	10.7	4.9	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	浅黄橙	
181	034-01	上師器	高杯	C-23	SZ62	口縁部1/12	16.8	—	3.2	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい橙	
182	034-02	上師器	高杯	C-23	SZ62	口縁部1/12	15.8	—	4.9	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	浅黄橙	
183	029-03	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部2/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
184	034-04	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部2/12	—	—	—	内： 外：ﾐｶﾞｷ	褐灰	
185	034-03	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部2/12	—	—	3.5	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	浅黄橙	
186	029-02	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部3/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	
187	032-05	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部12/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	
188	033-04	上師器	小型器台	C-23	SZ62	脚部4/12	—	9.0	3.3	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい橙	
189	028-03	上師器	小型器台	C-23	SZ62	脚部6/12	—	10.2	4.7	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
190	031-01	上師器	高杯	C-23	SZ62	口縁部1/12	25.2	—	4.1	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
191	035-01	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部1/12	26.0	—	7.3	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
192	035-02	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部2/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
193	038-02	上師器	高杯	C-23	SZ62	杯部12/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ，細描直線文 外：ﾐｶﾞｷ	橙	透孔３方向
194	038-04	上師器	小型器台	C-23	SZ62	杯部1/12	—	11.8	4.0	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	
195	030-03	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部12/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ，細描直線文	橙	透孔３方向
196	038-05	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部1/12	—	12.6	5.3	内：ﾊｹ 外：ﾐｶﾞｷ，細描直線文	にぶい橙	
197	028-01	上師器	高杯	C-24	SZ62	脚部1/12	—	14.4	4.6	摩滅	浅黄橙	
198	028-05	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部12/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	浅黄橙	
199	030-04	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部5/12	—	—	—	内：ﾊｹ 外：ﾐｶﾞｷ，細描直線文	にぶい黄橙	
200	038-06	上師器	高杯	C-23	SZ62	脚部5/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ，細描文	にぶい橙	
201	030-05	上師器	小型器台	C-23	SZ62	脚部2/12	—	12.6	2.9	内：ﾊｹ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	透孔４方向
202	035-03	上師器	壺	C-23	SZ62	口縁部1/12	9.0	—	5.3	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	浅黄橙	
203	028-04	上師器	壺	C-23	SZ62	口縁部5/12	6.6	—	3.8	内：ﾅﾃﾞﾐ，ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹ	橙	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構	部位	法量（cm）			技法・文様の特徴	色調（外面）	特記事項
						残存度	口径	底径	器高	施釉		
204	032-04	土師器	壺	C-23	SZ62	3/12	10.6	—	—	摩滅	明赤褐	
205	028-11	土師器	鉢	C-23	SZ62	4/12	7.3	2.0	6.1	内：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
206	028-06	土師器	鉢	C-23	SZ62	底部1/12	—	3.0	4.1	内：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 外：ﾅﾃﾞ、ﾅ	にぶい橙	
207	034-06	土師器	鉢	C-23	SZ62	底部6/12	—	3.4	2.5	内：ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾅ	浅黄橙	
208	028-08	土師器	壺	C-23 C-24	SZ62	口縁部4/12	15.3	—	2.8	内：ﾊﾅ 外：ﾊﾅ、刺突	にぶい橙	
209	028-10	土師器	壺	C-23	SZ62	口縁部1/12	14.4	—	2.4	内：ﾊﾅ 外：ﾊﾅ	橙	
210	032-03	土師器	壺	C-23	SZ62	口縁部片	—	—	—	内：ﾊﾅ 外：ﾊﾅ、刺突	にぶい黄橙	
211	032-02	土師器	壺	C-23	SZ62	頸部3/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、櫛描文	灰白	
212	028-07	弥生土器	壺	C-24	SZ62	肩部片	—	—	—	内： 外：櫛描文	浅黄橙	
213	032-01	土師器	壺	C-23	SZ62	胴部4/12	—	—	—	内：ﾊﾅ 外：ﾊﾅ	にぶい黄橙	
214	027-08	灰釉陶器	椀	C-24	SZ62	底部1/12	—	9.5	2.6	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白	
215	027-09	緑釉陶器	瓶	C-24	SZ62	胴部片	—	—	—	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、緑釉	緑	素地：にぶい黄橙
216	043-02	土師器	高杯	A-2	Pit1	杯部4/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい橙	
217	044-06	土師器	高杯	A-11	Pit3	脚部片	—	—	—	内： 外：ﾐｶﾞｷ	橙	透孔３方向
218	044-02	土師器	台付甕	B-12	Pit2	口縁部1/12	16.2	—	2.8	内：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	外面に煤付着
219	044-03	土師器	壺	B-22	Pit2	口縁部片	—	—	—	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ、刺突	にぶい黄橙	
220	043-06	土師器	壺	B-6	Pit2	底部12/12	—	2.6	1.9	内：ﾅﾃﾞ 外：ﾅﾃﾞ	にぶい橙	
221	044-01	土師器	鍋	B-9	Pit2	口縁部片	—	—	—	内：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	外面に煤付着
222	043-07	山茶碗	椀	B-8	Pit2	底部6/12	—	6.8	4.0	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｷｺﾞﾘ痕	灰白	
223	043-08	山茶碗	椀	B-8	Pit2	底部2/12	—	6.2	2.3	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	暗灰黄	
224	046-04	土師器	台付甕	D-13	Pit1	口縁部片	—	—	—	内：摩滅 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
225	047-01	土師器	杯	D-15	Pit1	1/12	9.8	—	2.2	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
226	048-04	土師器	高杯	D-14	Pit1	脚部3/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ	浅黄橙	
227	046-06	土製品	土錘	D-15	Pit1	完形	長5.4	幅1.4	—	ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	橙	重39.0g
228	044-07	土師器	甕	C-24	Pit3	口縁～頸部1/12	16.6	—	4.2	内：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	外面に煤付着
229	043-03	土師器	高杯	C-25	Pit1	杯部1/12	15.0	—	3.7	内：ﾐｶﾞｷ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
230	045-06	土師器	高杯	C-25	Pit4	脚部片	—	—	—	内： 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	
231	047-05	土師器	壺	C-22	Pit3	底部12/12	—	3.6	6.4	内：ﾅﾃﾞ 外：ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ	橙	
232	045-01	土師器	甕	C-29	Pit3	口縁部1/12	23.6	—	2.9	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
233	045-05	土師器	甕	C-34	Pit3	口縁部片	—	—	—	内：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
234	045-03	土師器	皿	C-33	Pit3	1/12	16.2	—	2.1	内：ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
235	045-02	土師器	皿	C-33	Pit3	2/12	15.8	—	2.0	内：ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
236	047-04	山茶碗	椀	C-12	Pit2	口縁部1/12 底部2/12	15.7	6.3	5.8	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白	内面に煤付着
237	046-03	土師器	甕	C-14	Pit1	口縁部片	—	—	—	内：工具ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	淡橙	
238	043-05	土師器	甕	C-29 C-30	Pit1	口縁部片	—	—	—	内：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
239	046-02	土師器	甕	C-14	Pit1	口縁部片	—	—	—	内：工具ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
240	044-05	土師器	鍋	C-34	Pit2	口縁部1/12	16.2	—	3.0	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	外面に煤付着
241	045-04	土製品	加工円板	C-33	Pit3	完形	長5.5	幅3.7	厚0.5		にぶい黄橙	重37.0g
242	046-05	土製品	土錘	C-14	Pit1	完形	長5.1	幅1.2	—	ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	浅黄橙	重37.0g
243	002-06	土師器	台付甕	範確No.10	包含層	台部12/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾊﾅ	にぶい黄橙	
244	001-05	土師器	高杯	範確No.11	包含層	脚部12/12	—	—	—	内：ﾊﾅ 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
245	001-06	土師器	高杯	範確No.11	包含層	脚部12/12	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	にぶい橙	
246	004-01	土師器	高杯	A-1	包含層	底部1/12	—	10.6	8.5	内：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	透孔４か所
247	001-03	土師器	高杯	範確No.9	包含層	脚部8/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	にぶい黄橙	
248	001-02	土師器	高杯	範確No.11	包含層	脚部12/12	—	—	—	内：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	明赤褐	
249	004-02	土師器	高杯	範確No.9	包含層	脚部12/12	—	—	—	内： 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	透孔３方向
250	004-01	土師器	高杯	範確No.9	包含層	底部2/12	—	12.8	9.2	内：ﾊﾅ、ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	透孔３方向
251	001-01	土師器	壺	範確No.9	包含層	口縁部4/12	11.5	—	8.7	内：ﾐｶﾞｷ、貝殻腹縁連弧文 外：ﾐｶﾞｷ	橙	
252	001-04	土師器	壺	範確No.9	包含層	口縁部1/12	16.0	—	4.0	内：ﾊﾅ 外：刺突	橙	
253	002-02	土師器	壺	範確No.11	包含層	底部4/12	—	6.4	4.7	内：工具ﾅﾃﾞ 外：ﾐｶﾞｷ	にぶい橙	
254	002-01	土師器	壺	範確No.11	包含層	底部12/12	—	6.5	3.9	内：ﾊﾅ 外：ﾊﾅ	にぶい黄橙	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量（cm）口径	底径	器高	技法・文様の特徴 施釉	色調（外面）	特記事項
255	002-03	土師器	杯	範囲No.16	包含層	2/12	13.8	—	3.2	内:ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
256	002-04	土師器	杯	範囲No.16	包含層	1/12	13.4	—	3.0	内:ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
257	002-05	灰釉陶器	瓶	範囲No.16	包含層	口縁部1/12	6.4	—	3.5	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰黄	
258	003-03	山茶碗	椀	範囲No.24	溝	底部3/12	—	6.2	1.8	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰白	
259	003-02	山茶碗	椀	範囲No.20	包含層	底部7/12	—	8.0	2.3	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	灰黄	
260	004-03	山茶碗	椀	範囲No.20	包含層	口縁部1/12 底部5/12	16.2	6.6	4.9	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾓﾐｶﾞﾗ痕	灰白	
261	003-01	土師器	甕	範囲No.19	包含層	口縁部2/12 頸部1/12	21.8	—	6.2	内:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	外面に煤付着
262	055-04	土師器	甕	A区	調査区南壁	口縁部片	—	—	—	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
263	049-08	土師器	甕	A区	重機掘削中	口縁部片	—	—	—	内:工具ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	外面に煤付着
264	049-07	土師器	台付甕	A区	重機掘削中	口縁部片	—	—	—	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
265	049-06	土師器	甕	A区	重機掘削中	口縁部片	—	—	—	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	外面に煤付着
266	049-03	土師器	台付甕	A区	重機掘削中	口縁～頸部2/12	11.1	—	2.3	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい黄橙	
267	050-03	土師器	台付甕	A区	重機掘削中	口縁部1/12 頸部2/12	17.0	—	4.9	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい黄橙	
268	050-05	土師器	台付甕	A区	重機掘削中	台部8/12	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい橙	
269	052-03	土師器	台付甕	A区	重機掘削中	台部12/12	—	6.2	4.4	内:ﾊｹ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	
270	052-04	土師器	高杯	A区	重機掘削中	杯部2/12	25.8	—	7.7	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	
271	052-01	土師器	高杯	A区	重機掘削中	杯部6/12	—	—	—	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	
272	052-02	土師器	高杯	A区	重機掘削中	杯部3/12	—	—	—	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	
273	053-02	土師器	高杯	A区	重機掘削中	杯部3/12	—	—	—	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	
274	053-03	土師器	高杯	A区	重機掘削中	11/12	—	7.6	—	内:摩滅 外:ﾐｶﾞｷ	橙	
275	052-05	土師器	小型器台	A区	重機掘削中	11/12	9.3	11.0	9.4	内:ﾊｹ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	透孔３方向
276	048-03	土師器	高杯	A区	重機掘削中	脚部片	—	—	—	内: 外:ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	
277	050-02	土師器	高杯	A区	重機掘削中	脚部9/12	—	10.7	8.7	内:ﾊｹ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	透孔３方向
278	050-04	土師器	高杯	A区	重機掘削中	脚部12/12	—	—	—	内: 外:ﾐｶﾞｷ	にぶい橙	透孔４か所
279	049-05	土師器	鉢	A区	重機掘削中	口縁部片	—	—	—	摩滅	橙	
280	050-01	土師器	壺	A区	重機掘削中	肩部片	—	—	—	内: 外:ﾐｶﾞｷ、櫛描文	橙	
281	049-04	土師器	壺	A区	重機掘削中	口縁部3/12	14.0	—	1.1	内:ﾐｶﾞｷ 外:ﾐｶﾞｷ	明赤褐	
282	049-02	土師器	壺	A区	重機掘削中	口縁部1/12	20.0	—	3.4	内:刺突 外:ﾊｹ	にぶい橙	
283	049-01	土師器	壺	A区	重機掘削中	底部12/12	—	8.1	2.8	内:ﾊｹ 外:ﾊｹ	明赤褐	
284	055-07	土師器	壺	A区	重機掘削中	底部12/12	—	5.2	4.2	内:ﾊｹ 外:ﾊｹ	橙	
285	048-01	土師器	甕	A区	表土	1/12	15.8	—	5.7	内:工具ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
286	051-01	土師器	甕	A区	表土	口縁～頸部1/12	15.4	—	6.5	内:工具ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	外面に煤付着
287	048-02	土師器	甕	A区	表土	2/12	14.8	—	5.9	内:ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
288	051-02	土師器	皿	A区	表土	1/12	22.8	—	1.9	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ、ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
289	051-03	土師器	杯	A区	表土	2/12	11.9	—	3.4	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
290	056-05	土製品	移動式カマド	A区	表土	不明	—	—	—	ﾊｹ	にぶい橙	
291	050-06	土製品	不明	A区	重機掘削中	不明	—	—	—	ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	橙	
292	058-05	土師器	壺	B-7	包含層	口縁部1/12	15.8	—	3.2	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白	
293	058-04	土師器	壺	B-8	包含層	頸部5/12	—	—	—	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
294	055-06	土師器	壺	B区	表土	口縁部11/12	11.8	—	3.2	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	橙	
295	057-02	土師器	壺	B区	表土	底部9/12	—	3.8	2.6	摩滅	橙	
296	057-01	土師器	高杯	B-8 B-9	攪乱	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ	橙	透孔３方向
297	056-03	土師器	高杯	B区	表土	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	浅黄橙	
298	057-03	土師器	高杯	B区	表土	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	橙	
299	056-04	土師器	高杯	B区	表土	脚部片	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾐｶﾞｷ、櫛描直線文	明赤褐	
300	058-03	土師器	台付甕	B区	表土	台部2/12	—	7.4	4.1	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	橙	
301	056-02	土師器	甕	B区	表土	胴部片	—	—	—	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ	橙	
302	058-06	土師器	甕	B-7	包含層	3/12	14.4	—	7.0	内:工具ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙	
303	058-02	土師器	壺	B区	表土	底部片	—	—	5.1	内:工具ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	にぶい黄橙	底部外面にヘラ描き
304	055-03	土師器	甕	B区	表土	口縁部1/12	19.4	—	3.2	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	
305	058-01	土師器	壺	B区	表土	口縁部3/12	17.8	—	5.9	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙	

NO	実測番号	種類（産地・系統）	器種	地区	遺構層位	部位 残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴 施釉	色調（外面）	特記事項
306	057-05	上師器	甕	B区	表土	6/12	18.0	—	10	内：工具ナデ、ヨコナデ 外：ハケ、ヨコナデ	橙	
307	057-04	上師器	甕	B区	表土	口縁部小片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい橙	
308	059-01	石製品	加工円板	B-8	包含層	ほぼ完形	長4.1	幅3.9	厚0.8	研磨	—	重さ15.9g、泥岩製
309	059-02	土製品	土錘	B-15	包含層	1/2	長3.0	幅1.1	—	ナデ	灰白	重さ3.0g
310	063-01	上師器	台付甕	C区	表土	口縁部2/12	15.6	—	1.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい橙	外面に煤付着
311	060-03	上師器	壺	C区	表土	口縁部2/12	16.0	—	6.3	内：工具ナデ、ヨコナデ 外：ハケ、ヨコナデ	にぶい黄橙	
312	066-03	上師器	壺	C区	表土	頸部3/12	—	—	—	内：ハケ、ヨコナデ 外：ハケ、ヨコナデ	橙	
313	060-02	上師器	壺	C区	表土	頸部5/12	—	—	—	内：ハケ、ヨコナデ 外：ハケ、ヨコナデ、刺突	にぶい黄橙	
314	066-01	上師器	壺	C区	表土	底部7/12	—	6.0	2.9	内：ハケ 外：	にぶい橙	
315	066-02	上師器	壺	C区	表土	底部12/12	—	5.0	1.8	内：ナデ 外：ハケ	明褐	
316	066-04	上師器	壺	C区	表土	肩部片	—	—	—	内： 外：櫛描直線文、刺突	橙	
317	063-02	上師器	台付甕	C区	表土	台部2/12	—	7.2	4.1	内：ナデ、ナデ 外：ハケ	にぶい黄橙	
318	064-01	上師器	台付甕	C区	南壁	台部5/12	—	5.0	2.9	内：ナデ、ナデ 外：ナデ、ナデ	にぶい橙	
319	063-03	上師器	台付甕	C区	表土	底部2/12	—	11.4	5.0	内：ナデ、ナデ 外：ハケ、ナデ	にぶい黄橙	
320	063-01	上師器	台付甕	C区	表土	底部4/12	—	7.4	4.0	内：ナデ、ナデ 外：ハケ	橙	
321	061-01	上師器	鉢	C区	表土	底部12/12	—	5.6	9.5	内：ハケ 外：ハケ	浅黄	有孔鉢
322	066-05	上師器	高杯	C区	表土	杯部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	明赤褐	
323	059-04	上師器	壺	C区	表土	3/12	6.2	—	4.3	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	橙	
324	062-02	上師器	壺	C区	表土	底部12/12	—	2.4	2.1	内：ナデ 外：ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙	
325	059-03	上師器	壺	C区	表土	底部12/12	—	4.7	1.6	摩滅	橙	
326	060-01	上師器	壺	C区	表土	12/12	11.4	4.8	21.7	内：ヨコナデ、工具ナデ 肩部櫛描直線文 外：ヨコナデ	橙	
327	062-01	上師器	壺	C区	表土	胴部3/12	—	—	—	内：ハケ 外：ヨコナデ	橙	
328	061-02	上師器	高杯	C区	表土	脚部片	—	—	—	内：ナデ、ナデ 外：ヨコナデ、櫛描直線文	橙	透孔3方向
329	064-02	上師器	高杯	C-27～C-24	南壁	脚部12/12	—	10.1	8.8	内：ハケ 外：ヨコナデ、櫛描直線文	にぶい橙	透孔3方向
330	063-07	上師器	高杯	C区	表土	脚部片	—	—	—	内：ハケ 外：ヨコナデ、櫛描直線文	橙	
331	061-03	上師器	高杯	C区	表土	脚部片	—	—	—	内：ハケ 外：ヨコナデ、櫛描直線文	にぶい橙	
332	063-06	上師器	高杯	C区	表土	脚部片	—	—	—	内：ハケ 外：ヨコナデ、櫛描直線文	明赤褐	透孔3方向
333	063-05	上師器	高杯	C区	表土	脚部片	—	—	—	内：ナデ、ナデ 外：ヨコナデ	橙	
334	059-05	上師器	甕	C区	表土	胴部片	—	—	—	内：ナデ、ヨコナデ 外：ハケ	にぶい橙	外面に～3描き
335	064-03	上師器	甕	C-22～C-23	包含層	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	浅黄橙	
336	065-01	須恵器	甕	C-22～C-23	包含層	胴部片	—	—	—	内：同心円当て具痕 外：叩き	黄灰	
337	064-04	須恵器	甕	C-22～C-23	包含層	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	褐灰	
338	064-05	須恵器	摺鉢	C-22～C-23	包含層	底部3/12	—	12.0	5.1	内：ナデ 外：ナデ	にぶい黄橙	底部外面に刺突
339	059-07	灰釉陶器	椀	C区	表土	底部3/12	—	7.7	2.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	灰黄	
340	066-06	山茶椀	椀	C区	表土	底部3/12	—	6.4	2.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	灰黄	内面に重ね焼痕
341	065-03	上師器	小皿	C-33～C-34	包含層	3/12	6.5	—	0.9	内：ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙	
342	065-02	上師器	杯	C-33～C-34	包含層	2/12	8.3	—	2.3	内：ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ナデ、ヨコナデ	浅黄橙	
343	065-04	上師器	皿	C-33～C-34	包含層	3/12	11.4	—	1.9	内：ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ナデ、ヨコナデ	灰白	
344	065-06	上師器	鍋	C-33～C-34	包含層	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい黄橙	外面に煤付着
345	065-05	上師器	鍋	C-33～C-34	包含層	口縁部片	—	—	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	にぶい黄橙	外面に煤付着
346	059-06	上師器	甕	C区	表土	口縁部1/12	13.8	—	3.1	内：ナデ、ナデ 外：ハケ	灰白	外面に煤付着
347	067-01	上師器	台付甕	D区	表土	台部12/12	—	6.6	4.8	内：ナデ、ナデ 外：ナデ、ナデ	橙	
348	067-02	上師器	高杯	D区	表土	脚部片	—	—	—	内：ナデ、ナデ 外：ヨコナデ	橙	
349	067-03	上師器	高杯	D区	表土	脚部片	—	—	—	摩滅	にぶい橙	
350	067-01	山茶椀	椀	D区	表土	底部5/12	—	7.7	2.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	灰黄褐	
351	067-05	上師器	小皿	D区	表土	4/12	7.2	—	0.9	内：ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙	
352	067-06	山茶椀	椀	E区	表土	底部1/12	—	8.6	2.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	灰白	

Ⅴ 総 括

1．弥生・古墳時代

（1）住居の分布と地点差

今回の調査は、調査区が線状であるため、遺構の詳細は不明な点が多いものの、遺跡のほぼ全域で弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居を確認することができた。この結果をもとに、集落の状況を見ておきたい（第24図）。

小社遺跡の第１・３次調査では、弥生時代終末期（濃尾平野の廻間Ⅰ～Ⅱ式併行期）の遺構・遺物が主体であった。本次調査においても同時期の竪穴住居がみられたが、ＳＨ43など古墳時代前期（廻間Ⅲ式併行期）に下るものが一定あり、若干の地点差がみられるようである。伊勢湾西岸では、弥生時代終末期をもって廃絶する集落が目立つなかで[10]、貴重な事例といえよう。

なお、近隣で出土した石鋤に対応する時期（古墳時代前期後半）や、古墳時代中・後期の遺構は認められなかった。また、弥生時代後期の土器が散見されるが、量的にはごく少ない。

竪穴住居は建て替えも含め、数棟づつの単位で分布しており、第１次調査地点や今回のＡ区西側、Ｂ区北側、Ｃ区南側では特に遺構の密度が高いことがうかがえた。一方で、Ｄ区では掘立柱建物の大型のピットもみられたことから、高床の倉庫や首長層の居館なども含まれていた可能性があろう。

こうした遺構の粗密や、比較的短期間での集落廃絶には、当地の地形が関連すると推測しておきたい。当地付近は、近世まで「小社山」とよばれる小高い場所や松林、ツツジ山も含む原野であった[11]。遺構の密集度が高いエリアは基盤層下部の砂礫が表出しており、高まりに相当した可能性が高い。そうした土地は水害には強く、晶作には適するが、生活用水の確保や水田の経営には不向きであったと考えられるのである。

（2）出土土器と赤色顔料付着土器

出土遺物では、胎土に金雲母を多く含むＳ字甕や、安濃川・雲出川流域に多い貝殻腹縁連弧文をもつ内湾口縁壺（251・326）など、遺跡外から搬入されたと考えられる土器がみられる。その一方で、主体は在地色の強い台付甕であり、古墳時代前期の布留系甕も在地色の強いものであった。また、県外他地域からの搬入とみられるものはない。内湾口縁壺などの土器は、宮川下流域の交流拠点などを介して得たものであろう。

ところで、特筆すべきものに、内面全体にベンガラが付着する有段口縁鉢（103）がある。これは、赤色顔料の使用に関わる器物とみられ、外面に煤が付着することから、火に掛けられた可能性が高いと考える。ただし、被熱の程度はそれほど強くない。

赤色顔料付着土器のうち、いわゆる内面朱付着土器は、外面に煤が付着し、火の使用が想定されることや、県内の事例でも鉢を中心に、高杯や器台などが用いられたことが知られている[12]。このうち、内外面にミガキのある精製鉢は、津市雲出島貫遺跡、津市位田遺跡、松阪市阿形遺跡などの例がある。また、近年の研究では、動植物由来の油脂（膠など）と顔料を混合して加熱する際の用具の可能性が指摘される[13]。こうした事例からすると、今回出土した資料も、ベンガラの使用に関する調整用具の可能性があるが、朱ではなくベンガラに関わるものという点が珍しい。

なお、ベンガラとの判断は肉眼観察にとどまっており、蛍光Ｘ線等による追証は今後の課題としておきたい。

2．古代・中世

今回の調査では、奈良時代の竪穴住居を複数棟確認した。周辺の上黒土遺跡やとの山遺跡、アレキリ遺跡でも、奈良時代の竪穴住居等がみられ[14]、やや小規模な集団が各所に住居を構えたとみられる。今回、立会調査を実施した辻ノ内遺跡も、こうした散在的な奈良時代集落のひとつであろう。

平安時代の集落は不明瞭であるが、ＳＨ38は平安時代前期（９世紀代）の土師器杯が出土しており、

平安時代にも竪穴住居が存続した可能性がある。その一方で、灰釉陶器や緑釉陶器がC区で比較的多く見られたことから、付近に緑釉陶器瓶などの著修品も有する居住者の存在が指摘できる。小社遺跡の西方にあるとの山・アレキリ遺跡でも緑釉陶器が一定量出土しており、それらと合わせて注意すべき成果である。

中世は、平安時代末～鎌倉時代には遺構・遺物が一定みられるが、今回の調査範囲では詳細を明らかにすることはできない。室町時代以降は居住の痕跡が皆無で、現在の小社集落付近に集落が移ったか、汁谷川右岸の氾濫原付近の集村に移行していくものと推測される。

註

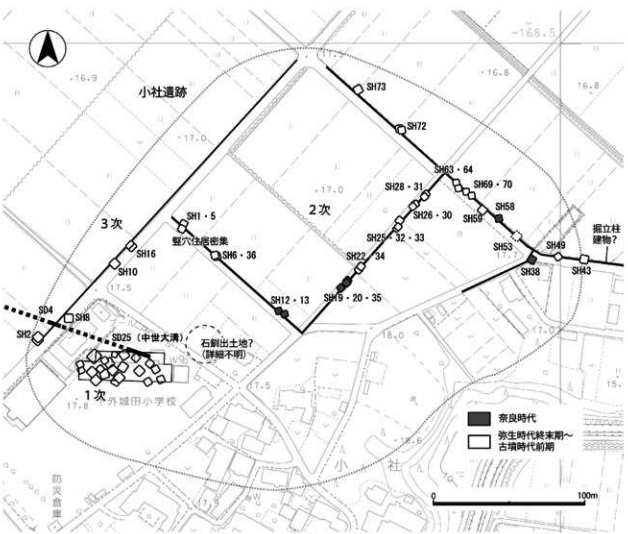
（1）石井智大「弥生終末期遺跡群の実態に関する試論」『研究紀要』第21号、三重県埋蔵文化財センター、2012年。

（2）玉城町『玉城町史』上巻、1995年。

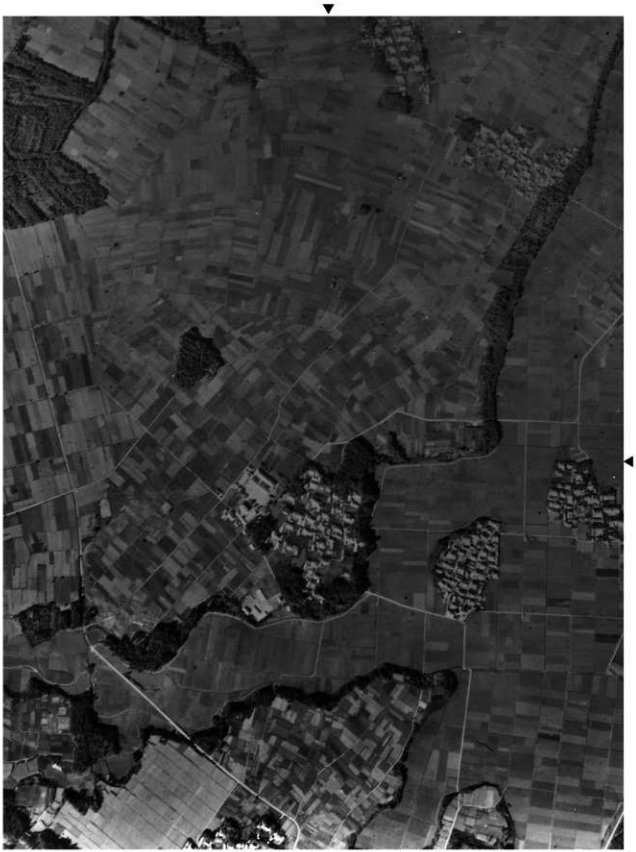
（3）川崎志乃「赤色顔料付着の土器について－津市雲出島貫遺跡出土土器を中心に－」『研究紀要』第８号、1999年。

（4）徳島県『赤色顔料生産遺跡及び関連遺跡の調査 若杉山辰砂採掘遺跡出土品編』2021年。

（5）三重県埋蔵文化財センター『との山・アレキリ遺跡』2018年/『上黒土遺跡発掘調査報告』2019年。



第24図　小社遺跡の遺構分布（1:2,500）



第25図　遺跡周辺の地形（1947年米軍撮影航空写真）　上が北、矢印先が小社遺跡

Ａ区東半（北西から）

Ａ区西半（南東から）

Ａ区東端（北西から）

ＳＨ１・５（北西から）

ＳＺ２底面（北西から）

ＳＫ11、ＳＨ13検出状況（北西から）

ＳＫ７・８（北西から）

ＳＨ13（北西から）

ＳＨ12（南西から）

ＳＨ６・36（南から）

B区南半（北東から、右奥が第１次調査地）

B区北半（南から）

ＳＨ22・34（南から）

ＳＨ19・20・35（北東から）

ＳＤ27（南から）

ＳＨ25・32・33（南から）

ＳＨ25・32・33土層（西から）

ＳＨ28・31（北から）

ＳＨ26・30（北から）

ＳＨ26・30遺物出土状況（北東から）

C区東半（北西から）

ＳＤ55（北西から）

ＳＨ63・64（南東から）

ＳＨ59（北西から）

C区西半（南東から）

ＳＨ72（南東から）

ＳＨ73（南東から）

ＳＫ65（南東から）

ＳＨ58（南東から）

ＳＺ62・ＳＨ69・70（北西から）

D区西半（東から）

ＳＫ48・ＳＨ49（東から）

上：ＳＨ43（東から）、下：同被熱痕（北から）

ＳＫ44（南西から）

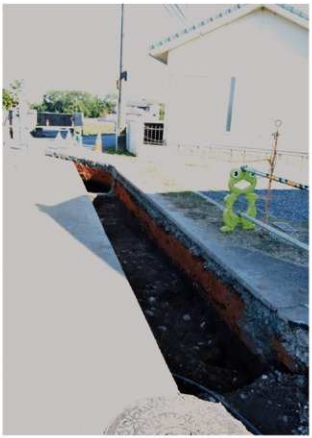
D13-Pit1（東から）

D区東半（東から）

ＳＤ40（北から）

ＳＨ38（南から）

E区南半（北東から）



E区北半（西から）

2

19

35

55

7

21

40

57

8

23

41

58

10

45

60

45

63

11

27

52

64

14

17

39

47

69

91

110

138

68

96

111

126

73

106

112

128

74

107

120

135

77

81

122

149

87

109

125

157

103

103

159

180

211

245

161

189

215

246

167

193

227

249

168

205

228

250

174

206

231

251

176

208

236

259

142

242

260

243

261

274

286

306

329

275

287

308

336

277

290

316

338

282

291

326

347

326

321

326

321

報告書抄録

ふりがな	おごせいせき（だい２じ）・つじのうちいせきほっくつちょうさほうこく
書名	小社遺跡（第２次）・辻ノ内遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	402
編著者名	櫻井拓馬
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2022(令和４)年　３月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おごせいせき 小社遺跡	わたらいぐんたきちょうおごそそね 度会郡玉城町小社曽根	24461	272	34度 28分 39秒	136度 39分 04秒	20190925 ～ 20200124	560㎡	農業用水管敷設
つじノうちいせき **辻ノ内遺跡**	わたらいぐんたきちょうおごそそね 度会郡玉城町小社曽根	24461	478	34度 28分 49秒	136度 39分 04秒	20191108 ～ 20191113	66㎡	農業用水管敷設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小社遺跡	**集落跡**	**弥生～中世**	竪穴住居・土坑・井戸・溝・ピット	土器・陶器	
辻ノ内遺跡	**散布地**	**古代～中世**	**土坑・ピット**	**土器**	

要約

遺跡は宮川左岸の段丘上に立地する。農業用水管の設置に先立ち、発掘調査を行った。その結果、弥生時代終末期～古墳時代前期、奈良時代の竪穴住居を30棟（重複含む）確認した。当該期の集落は遺跡全域に広がると推測されるが、過去の調査に比べ古墳時代前期の遺構・遺物が目立つ。当該期の遺物では、内面にベンガラが付着した鉢が特筆され、顔料の容器ないし攪拌などの調整用具であると推測される。

平安～鎌倉時代の遺構・遺物は、調査地の北側にみられ、出土遺物には平安時代の緑釉陶器瓶など優品もみられる。

辻ノ内遺跡は、大半が道路建設時の攪乱を受けており、詳細は不明であるが、ピット・土坑や古代の土師器片が確認された。

三重県埋蔵文化財調査報告４０２

小社遺跡（第２次）・辻ノ内遺跡発掘調査報告

～度会郡玉城町小社曽根～

2022（令和４）年３月16日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社